斐川町埋蔵文化財調査報告３

平野遺跡群発掘調査報告書　Ⅰ

1983年3月

島根県斐川町教育委員会

斐川町埋蔵文化財調査報告３

平野遺跡群発掘調査報告書　Ⅰ

1983年3月

島根県斐川町教育委員会

発　刊　の　こ　と　ば

このたび、大手企業である株式会社村田製作所が当斐川町の平野丘陵をその工場用地として誘致されることになりました。

この平野丘陵には古墳等の埋蔵文化財が数多く存在しておりますが、今回調査を行った平野遺跡群もその一つであります。

発掘調査では多くの資料を得ることができましたが、とりわけ横穴墓群では古墳時代後期における出雲平野の動向を窺うことのできるものが多数ありました。また、平野間樋、高射砲陣地跡は新しい時期の遺構ではありますが、これらは地域の歴史を刻んだ文化財であり、おろそかにできないと考え、その構造を記録することにいたしました。

本書が広く御活用頂ければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり終始御指導下さいました島根県教育委員会をはじめ関係者の皆様に衷心より御礼申し上げます。

１９８３年３月

斐川町教育委員会

教育長　古　川　喜志夫

例　　言

1. 本書は斐川町教育委員会が株式会社村田製作所（本社・京都府長岡京市）からの受託事業として実施した平野（ひらの）遺跡群（簸川郡斐川町大字上直江字平野 2,045 番地他）の発掘調査の報告である。
2. 調査は昭和５７年７月１２日から昭和５８年３月３１日まで実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査指導　勝部　昭（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第１係長）
　　西尾克己（　　〃　　主事）
調　査　員　宍道年弘（斐川町教育委員会嘱託）
調査補助員　桑原真治・大峠裕貴・長見康弘
　　今岡一三・谷沢　仁・荒木利幸
　　萩　雅人・原　広人・妹尾美典
事　務　局　多々納弘（斐川町教育委員会昭和５７年課長）
　　新宮義忠（　　〃　　昭和５８年課長）
　　金築　基（　　〃　　社会教育課主事）

4. 調査にあたっては村田製作所、斐川町役場開発課および地元各位の協力・援助があった。
5. 本書の執筆はⅠ章を金築、Ⅱ章を西尾、Ⅲ・Ⅳ章を宍道がそれぞれ分担した。人骨鑑定については、鳥取大学医学部（法医学教室）井上晃孝助教授に依頼した。また、図版製作は金築、宍道、桑原で行った。なお、実測図の方位は調査時における磁北である。
6. 出土遺物は斐川町教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

Ⅲ　平野遺跡群の概要 …… 5

1.　平野西支群の概要 …… 9

(1)　1号横穴墓 …… 9

(2)　2号横穴墓 …… 10

(3)　3号横穴墓 …… 13

(4)　4号横穴墓 …… 14

(5)　5号横穴墓 …… 16

(6)　6号横穴墓 …… 19

(7)　7号横穴墓 …… 20

(8)　出土遺物 …… 24

2.　平野高射砲陣地の調査 …… 26

3.　平　野　間　樋 …… 26

Ⅳ　ま　と　め …… 29

Ⅴ　出土人骨鑑定 …… 30

挿　図　目　次

発掘作業風景（写真）…… 1

図１　平野遺跡と周辺の遺跡…… 3

図２　平野遺跡群全体図 …… 6

図３　西支群横穴墓配置図…… 7 ～ 8

図４　１号横穴墓実測図 …… 11

図５　２号横穴墓実測図 …… 12

図６　３号横穴墓実測図 …… 15

図７　４号横穴墓実測図 …… 17

図８　５号横穴墓実測図 …… 18

図９　６号横穴墓実測図 …… 22

図10　７号横穴墓実測図 …… 23

図11　平野７号高射砲陣地実測図 …… 27

図12　平野間樋略図 …… 28

図13　６号横穴墓人骨出土状況 …… 31

図14　７号横穴墓人骨出土状況 …… 35

図　版　目　次

1～5　遺物実測図

6～16　土器観察表

17　平野遺跡群周辺の航空写真及び平野横穴墓西支群近景

18　1号横穴墓 羨門閉塞状況及び前景

19　2号横穴墓 玄室堆積土層及び前景

20　3号横穴墓 遺構検出状況及び前庭部

21　4号横穴墓 遺構検出状況及び前景

22　5号横穴墓 羨道堆積土層及び遺物出土状況

23　6号横穴墓 前庭堆積土層及び羨門閉塞状況

24　6号横穴墓 人骨及び遺物出土状況

25　7号横穴墓 羨門閉塞状況及び前景

26　7号横穴墓 人骨出土状況及び人骨

27　7号横穴墓 玄室加工状況

28　第7号高射砲陣地

29　平野間樋

30～34　遺物写真

Ⅰ．調査にいたる経緯

昭和48年、斐川町大字上直江（平野丘陵）に株式会社住友電工が進出を予定し、用地買収を行なったものの、事情により断念せざるを得なくなった。

その後、誘致企業を探した結果、関西の大手企業である株式会社村田製作所が元住友電工予定地であった平野丘陵に進出することとなった。しかしながら、経営規模の関係上用地不足となり、昭和57年４月より追加買収が行なわれ、同年７月22日に進出の公式発表が行われた。

そして、これに伴い埋蔵文化財の有無が問題になってきた。当該地周辺には三角点古墳をはじめとする遺跡が存在していたため、島根県教育委員会に依頼し昭和56年６月２日に分布調査（調査者…文化課　松本岩雄主事）を実施した。その結果、円墳、高射砲陣地跡等が確認され、更には横穴墓が存在する可能性があったため関係者と協議のうえ、昭和57年７月12日より昭和58年３月５日まで現地調査を実施した。

調査風景

II．遺跡の位置と歴史的環境

平野遺跡群は島根県簸川郡斐川町大字上直江字平野に所在する。この平野一帯は、山陰最大の穀倉地帯である出雲平野の東部にあたり、斐川町のほぼ中央部に位置している。

本遺跡群は標高40mの洪積層から成る低丘陵に存在し、北側には山陰本線と国道9号線が走り、更にその前面には築地松で著名な散村風景が展開する。一方、南側には『出雲国風土記』（733年作成）に載る出雲郡の神名火山（かむなびやま）とされる標高366mの仏経山が聳えている。この平野丘陵も仏経山から派生する支丘の一つであるが、町の中央部を東へ貫通する新川廃地（1832～1940年）によって切断され、現在では独立丘陵となっている。さて、平野丘陵のある上直江地区には、平野遺跡群をはじめ、岩野原（いわのばら）古墳（18mの円墳・箱形石棺・鉄剣2）、三角点古墳（墳丘不明・箱形石棺）、狼山（おおかみやま）遺跡、剣山横穴墓、コモゴ山横穴墓群、亀山横穴墓、狼山城跡等多くの遺跡が存在する。以下、これらの遺跡を含め、町内の古代の概要を記述する。

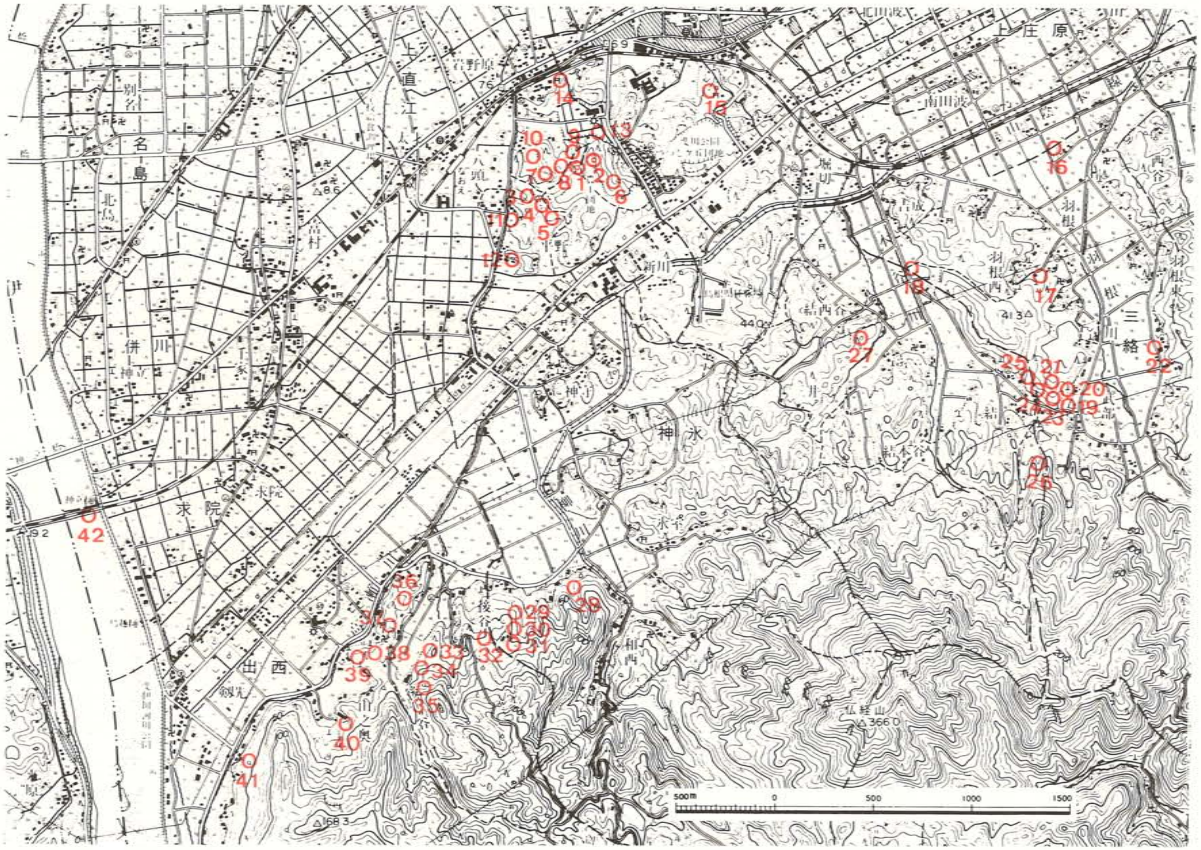
縄文時代から弥生時代にかけての土器を伴う遺跡は発見されていないが、平野丘陵から石鏃・石槍が、上学頭（かみがくとう）の永徳寺周辺や三絡（みつがね）の波知神社付辺の水田より石斧が、また、羽根（はね）地区から石鏃が採集されており、沖積地に面する低丘陵一帯が居住地域になっていたことを示している。

弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な遺跡としては、平野丘陵から西方3kmの地点にある斐伊川鉄橋遺跡が挙げられる。この遺跡は、昭和37年に行われた山陰本線の鉄橋架け替え工事中に発見されたもので、地表下7mの土層から弥生土器および土師器が多く出土している。これは仏経山北麓に広がる沖積平野一帯にも多くの集落遺跡が地表下に埋没していることを示唆する有力な資料である。また、平野丘陵と隣接する狼山からは壷棺とみられる土師器が発見されている。さらに、それと同時期の土師器が出西沢田（たくだ）や平野の丘陵からも表採されているが、その遺跡の性格は詳かでない。

斐川町内の古墳・横穴墓は、南部の丘陵を中心に50数か所が知られている。なかでも、神庭（かんば）・直江・出西の3地区に密集しており、この地域が古墳時代に入って本格的に開発されたことを示している。

中期に属する大形の古墳は、神庭岩船山古墳（全長57mの前方後円墳・舟形石棺）、軍原（いくさばら）古墳（墳丘不明・長持形石棺・長刀4、勾玉2、管玉18、櫛6、クモ貝製貝輪2、鉄鏃若干）、小丸子山古墳（径35mの円墳・礫床・直刀）があり、いずれも斐川町東部（奈良時代の健部郷（たけるべ）に当る）に所在し、当時この地域を支配した強大な首長が台頭したことを物語るものである。後期の大形古墳としては、平野丘陵の東南約2kmの地点に所在する出西丸子古墳（墳丘不明・全長7mの横穴式石室・子持須恵器）がある。この石室は玄室の奥

図１　平野遺跡と周辺の遺跡



１．平野横穴墓西支群　２．平野横穴墓東支群　３．平野１号墳　４．平野２号墳　５．平野３号墳　６．平野４号墳　７．平野５号墳　８．平野６号墳　９．平野７号墳　10．剣山横穴墓群　11．コモコ横穴墓群　12．亀山横穴墓群　13．三角点古墳　14．岩野原古墳　15．狼山古墳　16．白塚古墳　17．西光院裏山古墳　18．貴船古墳　19．古殿１号墳　20．古殿２号墳　21．西１号墳　22．武部東古墳　23．西２号墳　24．石橋１号墳　25．石橋２号墳　26．武部西古墳　27．結城古墳　28．外ヶ市古墳　29～31．長者原古墳群　32．後谷東古墳　33．八幡宮横横穴墓　34．後谷町道脇古墳　35．後谷山簑古墳　36．沢田横穴墓群　37．壺棺出土地　38．栖雲寺山古墳　39．出西丸子古墳　40．山の奥横穴墓群　41．青木勝四郎宅西横穴墓群　42．斐伊川鉄橋遺跡

壁、天井石が各１枚、側壁が数枚の切石で構成されたいわゆる石棺式石室と呼ばれるものに属する。また、玄室と羨道との境界にある閉塞石の表面には、宍道湖周辺部で５例発見されている「卅」状の陽刻が施されており、それらの古墳との関連が注目される。さらに小形で石棺式石室の形態をとる建部西古墳、出西後谷古墳、栖雲寺山古墳もこの地域を代表する後期古墳といえよう。

一方、横穴墓は13か所で確認されている。現在判明している限り、その分布には偏りが認められ、仏経山南麓の斐伊川流域と出西丸子古墳の周辺および本遺跡群の所在する上直江一帯に集中している。大倉横穴墓群（６穴・家形・須恵器）、御射山横穴墓群（３穴・カマボコ形・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器）、平野東横穴墓群（12穴・カマボコ形・テント形・勾玉・金環・刀子・須恵器・土師器）、平野西横穴墓群（17穴・カマボコ形・金環・馬具・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器・土師器）、剣山横穴墓群（２穴・須恵器）、コモゴ山横穴墓（１穴・家形）、亀山横穴墓（１穴・須恵器）、沢田横穴墓（１穴・須恵器）、八幡宮横穴墓（１穴・丸天井・須恵器）、青木勝四郎宅西横穴墓群（２穴）、海の平横穴墓（３穴）、岩海横穴墓群（４穴・家形）、墓田横穴墓群（４穴）。以上の横穴墓の玄室は家形、カマボコ形、テント形と様々な形態を呈している。このことは、斐伊川をはさんで西側の神戸川流域には妻入整正家形が密集しているのと好対照をなしており、同じ出雲平野にも地域色をみることができる。しかし、羨道と玄室との関係は、出雲西部に多い妻入り形式のものが圧倒的である。時期は山陰須恵器編年のⅣ期初めに該当するものが大半であり、７世紀前半に作られたものと推定される。この様に、斐川町の古墳文化は後期後半に至って一時に開花したといえるが、極めて短期間のものであった。

律令時代には、平野一帯は、出雲郡漆治郷に属し、出西に置かれた出雲郡家の所在した出雲郷の東側に隣接していた。奈良時代の史料として有名な『正倉院文書』の「天平十一年出雲国賑給歴名帳」（739年）によると、同郷に深江里・工田里・犬上里の三つの里名が存在していたが、上直江がどの里に当るかは定かでない。同帳によれば、漆治郷にはさまざまな氏を名のる30人の戸主が記載されており、複雑な氏構成であったことが窺える。また、臣・首・君の姓をもつ者と部のみの者とに分かれた身分構成が認められ、８世紀の村落構造を知る上での手掛りとなるであろう。

しかし、その後の平安時代前後の史料は全く存在せず、文永８年（1271）の『千家文書』に漆治郷の記事が現われるまでは、空白の時代であった。

Ⅲ．平野遺跡群の概要

平野遺跡群は、丘陵上にある７基の古墳と10基の高射砲陣地跡、および丘陵斜面で確認された２群の横穴墓と間樋１所で構成されている。

古墳と高射砲陣地跡は、昭和56年６月２日の島根県教育委員会と斐川町教育委員会の分布調査によって確認されたものである。それによると、１号墳は径13ｍ、高さ1.５ｍ余りの円墳で、東向斜面から須恵器が出土している。２号墳は径9.５ｍ、高さ1.２ｍの円墳で墳頂の西半分は山道によって削平されている。３号墳は径12ｍ、高さ１ｍの円墳で、墳頂の東半分と南半分は、山道と高射砲陣地によって削平されている。５号墳は径7.５ｍ、高さ0.５ｍの円墳で、墳頂は地山が露出している。なお、４号墳については、今回の調査区域内にあたるため調査を行ったが、古墳に伴う遺構及び遺物は検出されなかった。

また、高射砲陣地については、調査区域内にあたる６～８号砲台跡を調査した。これらを調査する目的については、高射砲陣地の立地が古墳の築造にも適する場所であることを想定した上で、それらが古墳の上、もしくは古墳を破壊して造られたのではないかと考えられたからである。しかし、調査の結果、古墳に伴う遺構または遺物の検出はなく、縦横断面の土層でも確認し得なかった。また、周辺斜面の踏査及びグリッド掘りの調査でも、遺物等の発見はなかった。砲台跡については後述する。

今回の調査で最も主眼をおいたのは、丘陵の内側に面した標高７～15ｍ間の斜面の調査であった。従来、丘陵の外側に面した斜面においては、剣山・コモゴ山・亀山などの横穴墓群が知られていたが、内側に面した斜面においては、全く知られていなかった。従って調査方法は５×５ｍ～５×10ｍのグリッドを任意に30か所設定し、遺構面の確認と遺物の発見に努めることとした。

その結果、第３、５、９、10、29、30グリッドにおいて、須恵器の蓋坏、甕片等が１～３片検出された。しかし、遺構は皆無であることや、出土した遺物が表土や流れ込みの土に含まれていたため、調査区域外つまり上から流れ込んだものと判断した。

一方、第４、第６グリッドからは、黒色土層あるいは地山（真砂土）崩壊土に集中して須恵器片が含まれていたため、グリッドを左右に拡大し遺構検出を行った。その結果、第４グリッドで５基の、第６グリッドで７基の横穴墓を確認し、調査することができた。以下便宜上第４グリッドに存在する横穴墓の一群を東支群、第６グリッドに存在する横穴墓の一群を西支群と呼称し、両支群の各横穴墓の概要を記すこととする。

なお、東支群については、昭和58年度に調査範囲を拡大するため、更に横穴墓の増加が見込まれている。横穴墓は大なり小なり群で構成されている性格上、2年度分を合わせて検討する必要があろう。従って、東支群の報告は次回の調査報告書で述べることとする。

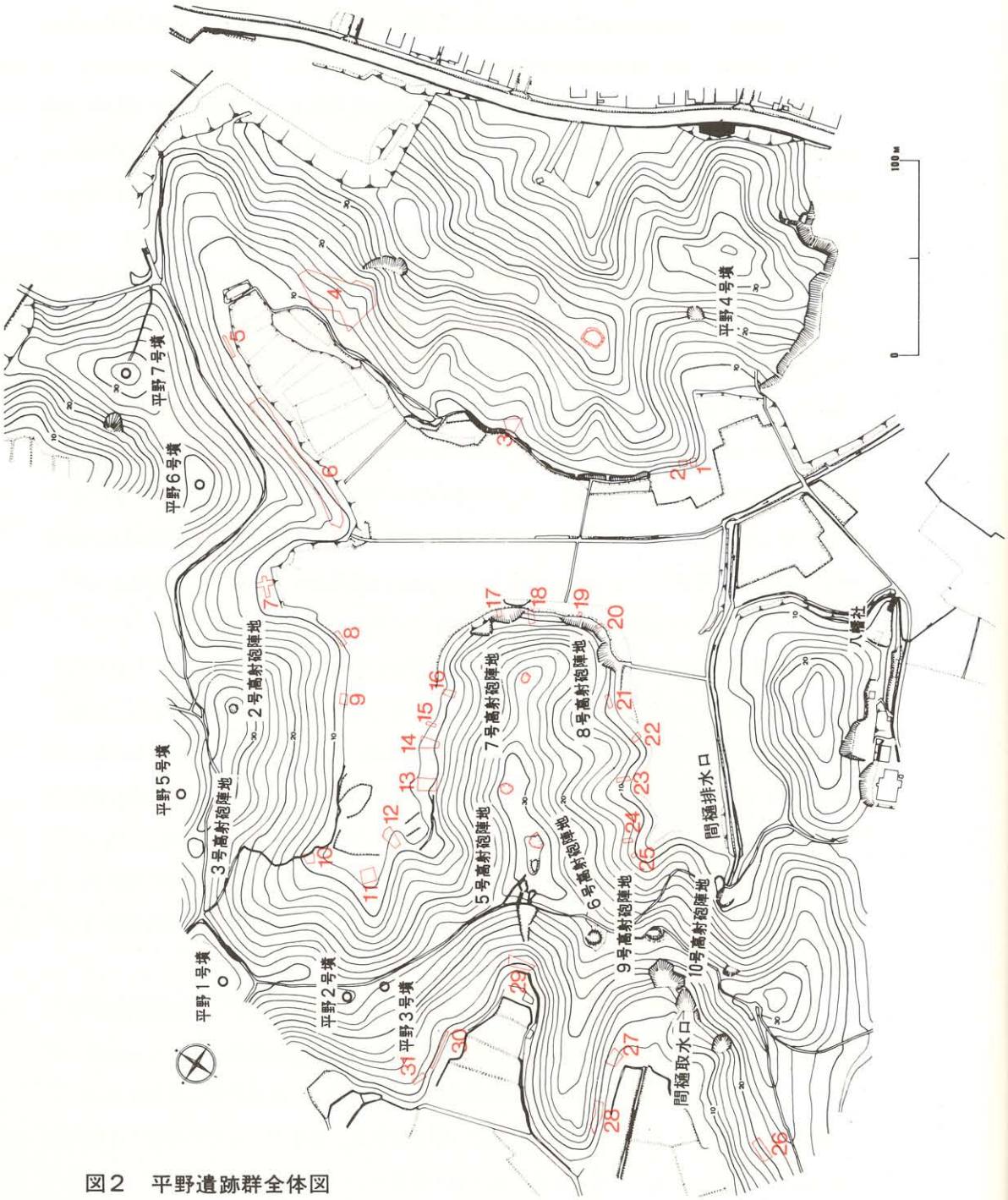
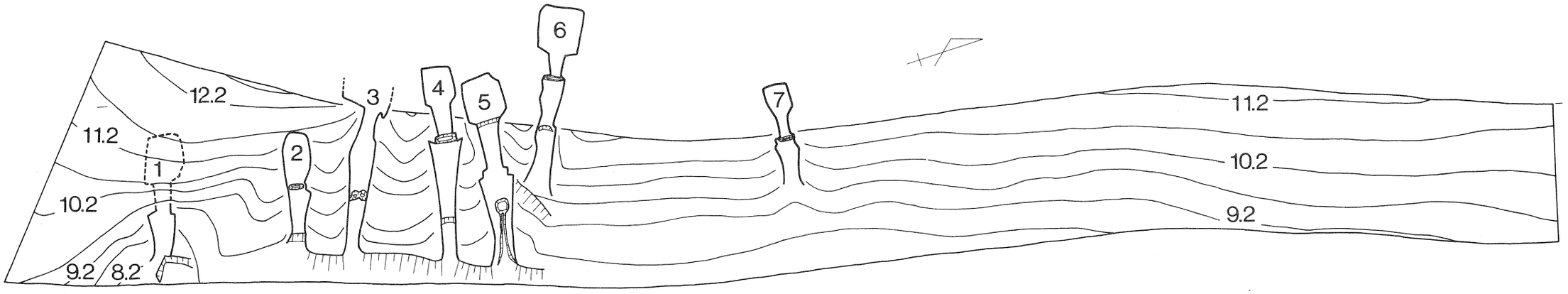
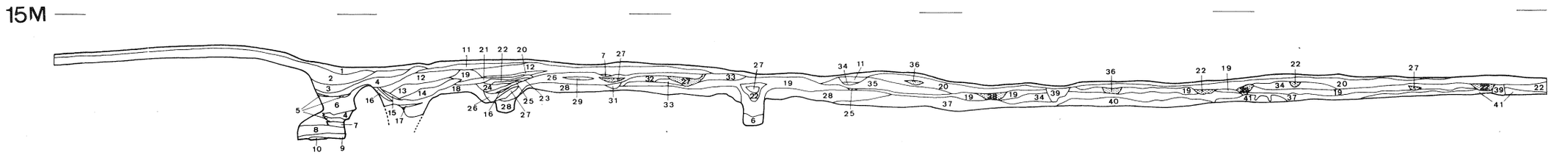
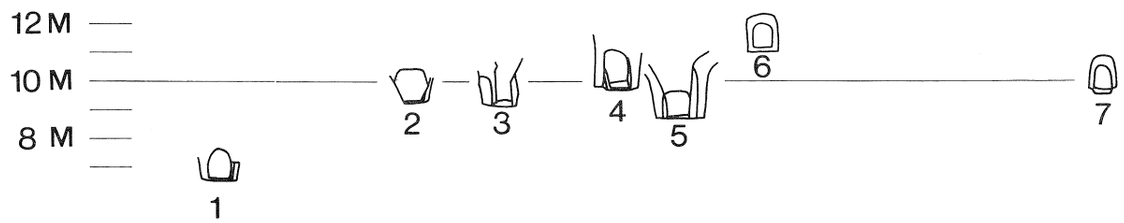


図2　平野遺跡群全体図







0 10M

1. 表　土
2. 明茶色土(細砂粒含む)
3. 灰茶色土
4. 淡茶色土
5. 白黄色土
6. 淡黄色土
7. 黄茶色土
8. 赤茶色土(スエキ出土)
9. 黒褐色土
10. 明茶褐色土
11. 暗黄色土
12. 黄褐色土(小ブロック少量含む)
13. 褐色土(　〃　多量に含む)
14. 暗灰色土(　〃　含む)
15. 暗茶色土
16. 灰色土
17. 茶色土(ブロック含む)
18. 茶色土
19. 黄黒色土(ブロック少量含む)
20. 暗黄褐色土(小ブロック少量含む)
21. 明黄褐色土(中ブロック含む)
22. 暗黄褐色土(少ブロック多量に含む)
23. 赤黄褐色土(　〃　含む)
24. 暗赤黄色土(　〃　)
25. 黒灰色土　(　〃　)
26. 灰褐色土　(スエキ出土)
27. 黒色土　(　〃　)
28. 茶褐色土
29. 暗茶褐色土(ブロック少量含む)
30. 明黄色土
31. 暗黄茶色土(ブロック少量含む)
32. 淡黄色土(　〃　多量に含む)
33. 黄色土
34. 明茶褐色土(中ブロック含む)
35. 淡黒色土(ブロック少量含む)
36. 暗黄色粘質土
37. 攪　乱
38. 赤茶色粘質土(ブロック含む)
39. 〃　(細砂粒含む)

図3　西支群横穴墓配置図

1. 平野西支群の概要

西支群は、馬蹄形の谷が南へ開いた起伏の少ない西側斜面に立地し、調査した7穴は、いずれも標高7～12mの比較的緩傾斜面に穿たれている。横穴墓は南端のものから順次1号横穴墓、2号横穴墓とし、北端のものを7号横穴墓と呼ぶこととする。この西支群において、南限は1号横穴墓であるが、北限は未調査である。しかし、西壁断面において6号横穴墓と7号横穴墓の間に2穴、7号横穴墓の北側に8穴を確認できる。従って、西支群は17穴前後の横穴墓で構成されているといえよう。

(1) 1号横穴墓

本横穴墓は、西支群の中では最も南側に位置し、東向きに開口している。羨門部分の標高は7.5mで、今回調査した7穴の横穴墓の中では、最も低いところにある。表土を剥いだ時点で、玄室の天井が丸く陥没し、前庭の一部も撹乱されていることを確認した。

玄室の平面プランは、奥行き228cm、横幅は奥行き付近で160cm、入口付辺で154cmを測り、中央でやや胴張りのある隅丸長方形を呈する。奥壁は100cmまでは外傾するが、側壁は140cmまでは内傾してたちあがる。天井の形態は崩壊しているため明らかでない。玄門の形態は両袖ながら左右対象ではなく、右側前壁がやや長くのびている。床面は入口付辺でU字形に掘られているが、本来はここに段がつき、玄室と羨道との境界になると思われる。

羨道は長さ140cm、幅は玄室の入口で90cm、羨門で80cmを測り、玄室に近づくにつれて僅かながら広がる形状を呈する。天井は大半が崩壊しているが、比較的保存状態の良い部分の高さは80cmを測るので、それに近い数値を示すものであろう。羨門は単純構造を呈し、閉塞施設は認められない。

前庭は長さ210cmと比較的短かく、幅は80～132cmを測り、壁は外傾する。前庭入口部分で高い段をもつ。

堆積した土層は、前庭部分については黄色真砂土の上に黒色土層が整然と堆積していた。羨道から玄室にかけては、有機質を含む白黄色土層が床面にみられた以外はすべて天井壁及び側壁の地山崩壊土で覆われていた。

検出された遺物は極く少量で、次のとおりである。

玄　室	須恵器	坏1
前　庭	須恵器	甕片少数

玄室では坏が唯一の遺物である。坏は蓋坏の坏部で、奥壁寄りに伏せた状態で置かれていた。坏の底部外面はヘラ切りの後、荒いナデ調整を施している。たちあがりは低く、小

形品の割にはやや厚みがある。この形態のものは、本横穴墓群の中では比較的多く出土している。

前庭出土の甕片は、小破片で時期判定の資料になり得るものではなかった。

(2) 2号横穴墓

本横穴墓は東向きに開口し、羨門部分の標高は10mとなる。南側に位置する1号横穴墓とは、間に突起伏のたかまりをはさんで約5mの間隔がある。横穴墓の上面を検出した時点では、黒色土層内に黄色土層がレンズ状に混入し、既に横穴墓が崩壊したか、あるいは荒されている様子であった。

玄室は盗掘坑が多く旧状を保っていないが復元すると、平面プランは、奥行き186cm、横幅は奥壁付近で114cm、入口付近で120cmを測り、縦長長方形を呈するものであろう。奥壁は、湾曲しているが側壁は崩壊しているので、天井の高さは明らかでない。また、盗掘坑は、玄室の南壁に2坑、北壁に1坑、北東隅に1坑が掘り込まれている。

羨道の長さは104cmを測る。横幅は側壁の地山が軟弱で既に崩壊していたり、若干の掘り過ぎのため不整形となっているが、比較的旧状を保っているところでは60cmの幅がある。側壁の高さ及び天井の形態は不明である。羨門は単純構造で床面には閉塞用の板材を嵌め込んだと推定される横溝が検出された。

前庭は長さ212cm、幅は58～88cmを測り、壁は外傾する。前庭入口部分で低い段をもつ。

堆積した土層をみると、玄室から前庭にかけて淡黄色土層、灰黄色土層、暗黄色土層が整然と堆積し、その上に天井壁崩壊土が乗っていた。更に、黒色土層が堆積し、その中から須恵器が数片出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

羨　道	須恵器	甕片少数
前　庭	須恵器	蓋1　坏1　高坏1　甕片少数

前庭出土の蓋は口径12.5cm、高さ5cm、坏は底部を欠くが、口径11.8cmを測り、いずれも比較的大形品に属するものである。高坏も比較的大形とみられるが、口縁部と脚部を大きく欠いている。羨道及び前庭出土の甕片は小破片で、2～3片である。

以上、検出された遺物は堆積土層からのもので、本横穴墓の築造時期と一致させるわけにはいかないであろう。

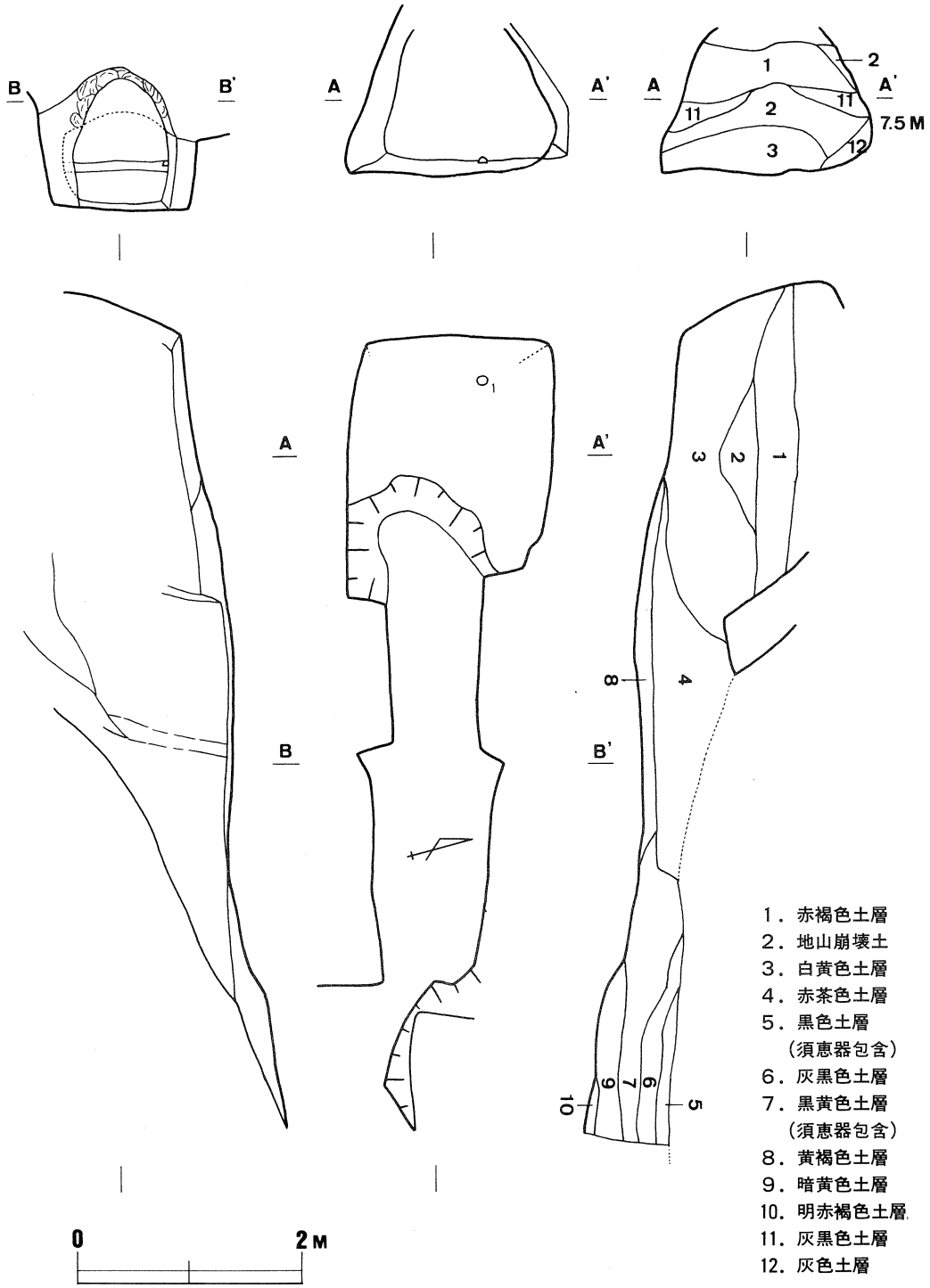

B
B'
A
A'
A
A'
1
2
11
11
2
3
12
7.5 M
A
A'
B
B'
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
2 M
1．赤褐色土層
2．地山崩壊土
3．白黄色土層
4．赤茶色土層
5．黒色土層
（須恵器包含）
6．灰黒色土層
7．黒黄色土層
（須恵器包含）
8．黄褐色土層
9．暗黄色土層
10．明赤褐色土層
11．灰黒色土層
12．灰色土層

図４　１号横穴墓実測図

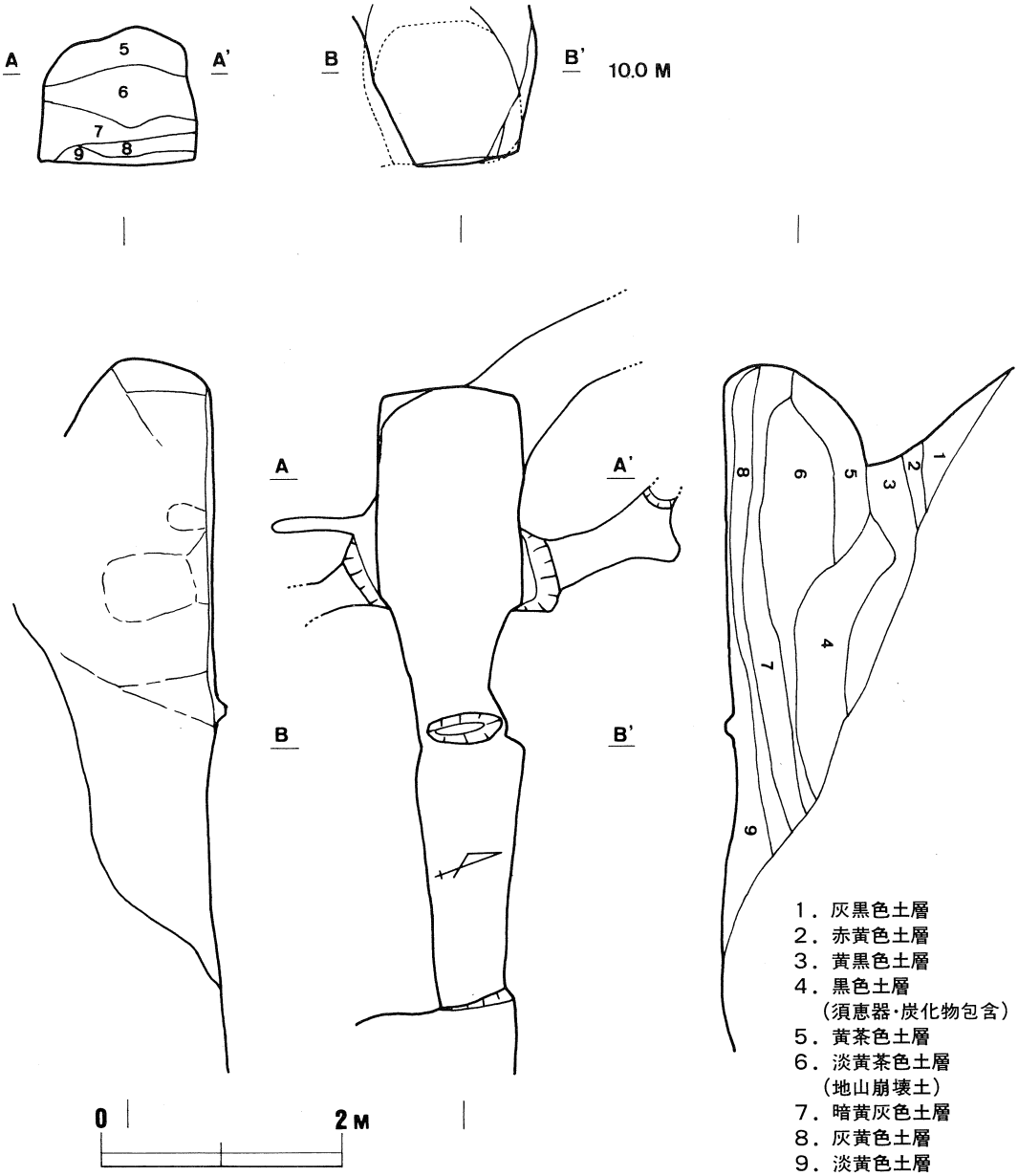

A
A'
5
6
7
8
9
B
B'
10.0 M
A
A'
B
B'
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
2 M
1．灰黒色土層
2．赤黄色土層
3．黄黒色土層
4．黒色土層
（須恵器・炭化物包含）
5．黄茶色土層
6．淡黄茶色土層
（地山崩壊土）
7．暗黄灰色土層
8．灰黄色土層
9．淡黄色土層

図5　2号横穴墓実測図

(3) 3号横穴墓

本横穴墓は2号横穴墓の北側に隣接し、東南東に開口している。羨門部分の標高は9.5 mである。玄室と羨道は既に崩壊しており、調査は玄室の入口までとした。これは、玄室が調査区域外であった事も一つの原因ではあるが、これ以上掘り進むと天井壁崩壊土と軟弱な地山（真砂土）による崖崩れ等の危険があったため調査を断念したわけである。

調査することのできた玄室入口も、南側が盗掘と思われる穴で大きく乱れており、旧状を保ってはいないのであるが、あえて横幅を推定すると214 cm前後になる。側壁及び、天井壁の高さは不明である。

羨道は長さ108 cm、幅は玄室の入口で84 cm、羨門で74 cmを測るが、これも原形を保ってはいないので形状を判断することはできない。天井は崩壊しているが、側壁のたちあがり約80 cm、羨門の高さが約98 cmとなるため、天井の高さはほぼそれに近い数値になるものと思われる。羨門の床面には閉塞用の板材が嵌め込まれていたと思われる横溝が穿ってある。羨門構造は、南側壁に少しアクセントがあるものの、盗掘坑の影響とも考えられ判然としない。

前庭は長さ574 cm、幅68～114 cmを測り、非常に細長く、入口付近でラッパ状に開く形状を呈する。床面は羨門から274 cmのところで、落ち込む浅い穴が2個検出されたが、用途は不明である。壁は低く外傾する。

堆積した土層についてみると、前庭から羨道にかけて一様に明茶褐色土層が堆積し、その後、前庭では白茶色土層、黄褐色土層の順に、羨道では天井壁崩壊後に黒褐色土層が堆積したものと考えられる。上層から多くの遺物が出土し、とくに黒色土層からは須恵器甕片が集中して出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

玄　室	須恵器	甕片少数
前　庭	須恵器	蓋2　坏5　高坏1　提瓶1　甕2　横瓶1

玄室出土の甕片は1片で、赤茶色土層からのものである。

前庭出土の蓋は口径13cm前後のものである。坏は口径8.6～9.6cmと小形品に属するものである。高坏は脚部の底径8.9 cmと大きいものである。これらは堆積土層から出土したものであるが散乱した状態で出土した。また黒色土層から集中的に甕片が出土した。

甕は復元すると2個体分となるが、胴部下半は欠損している。とくに底部にあたる破片が1片もなかった。このことは、須恵器甕を用いた何らかの墓前祭祀が執り行われたことを示すものであろうか。

横瓶は胴部の一方を欠き、出土状況からみると甕と同様な使われ方をしているものと考えられる。

(4) 4号横穴墓

本横穴墓は3号横穴墓の北側に隣接し、東向きに開口している。羨門部分の標高は10mである。玄室と羨道の天井は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。そのため、本来の調査を断念し、危険防止のため調査区域外にもかかわらず、玄室上部の表土から一気に掘り下げる格好となった。

玄室の平面プランは、奥行き334㎝、横幅は奥壁付近で148㎝、入口付近で136㎝を測り、隅丸長方形を呈する。天井の形態は不明であるが、高さは奥壁でやや外傾して134㎝まで、側壁でやや内傾して120㎝までたちあがるため、それに近い数値と思われる。床面にみられる三角形の穴は後世の撹乱であろう。玄室入口は両袖式となっている。

羨道は長さ158㎝、幅は玄室の入口で98㎝、羨門で68㎝を側り、玄室に近づくにつれて広がる形状を呈する。天井は崩壊しているが壁の一部が高さ80㎝ほど残っているのでその付近で天井に至るものと思われる。羨門は二重構造を呈し、羨道側の床面に閉塞用の板材を嵌め込んだものと思われる横溝が穿ってある。

前庭は長さ116㎝、幅は62～158㎝を測り、羨門付近でラッパ状に大きく広がる形状を呈する。壁は外傾し、床面は羨門から424㎝のところで低い段を有する。

堆積した土層をみると、前庭から玄室にかけて淡黄色土層が薄く堆積した上に、前庭では淡黄茶色土層、茶色土層が堆積し、さらにその上に遺物を多く含む黒色土層が乗っている。一方玄室では、天井壁の崩壊土で全面が覆われていた。

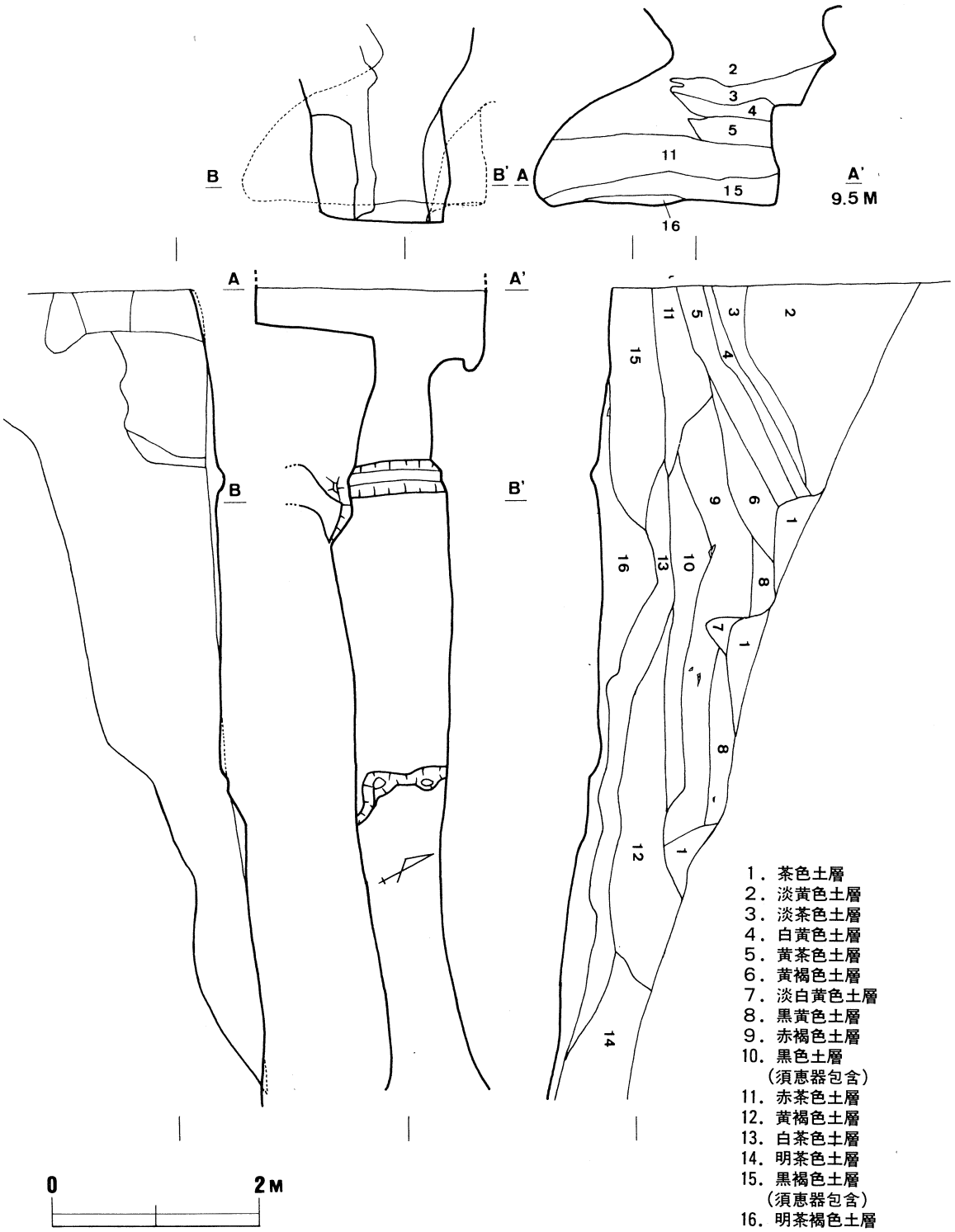
検出された遺物は次のとおりである。

玄　室	鉄製品	鉄鏃1
	須恵器	蓋2　坏2　壷1　提瓶1
前　庭	須恵器	蓋1　坏2　甕1　甕2

玄室出土の遺物はすべて、玄室と羨道を結ぶ中軸線より北側の床面直上からのものである。蓋は奥壁に接し、入れ子式に伏せた状態で出土した。坏は奥壁と前壁の中間に上向きに置かれたものと、奥壁際に伏せたものとがある。坏は口径11.1～11.5㎝、蓋は12.5～13.5㎝と大形品に属する。

提瓶は坏と蓋の中程に口縁部を南に向け横転した状態で出土し、壷は左前壁際で口縁部を玄室入口に向け横転した状態で出土した。

鉄鏃は柄のみ現存し、提瓶の後ろに先端を南に向けて置かれていた。



1．茶色土層
2．淡黄色土層
3．淡茶色土層
4．白黄色土層
5．黄茶色土層
6．黄褐色土層
7．淡白黄色土層
8．黒黄色土層
9．赤褐色土層
10．黒色土層
（須恵器包含）
11．赤茶色土層
12．黄褐色土層
13．白茶色土層
14．明茶色土層
15．黒褐色土層
（須恵器包含）
16．明茶褐色土層

図6　3号横穴墓実測図

前庭出土の蓋と坏はいずれも小破片で復元不可能なものである。瓶は底部のみ、甕は口縁部のみのものと、頸部のみのものである。これらは主に黒色土層から出土した。

(5) 5号横穴墓

本横穴墓は4号横穴墓の北側、僅か60㎝のところに位置し、東向きに開口し、主軸も4号横穴墓とほぼ平行している。羨門部分の標高は9.5㎞である。3号・4号横穴墓同様、玄室及び羨道は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。従って、危険防止のため調査方法の変更を余儀なくされ、充分な調査を行うことはできなかった。

玄室の平面プランは、奥行き240㎝、横幅は奥壁付近で174㎝、入口付近で190㎝を測り、入口部分を底辺とする隅丸のやや台形状を呈する。天井は崩壊し、奥壁及び側壁も至る所が剥離しているために高さは不明である。床面は羨道より若干高く造られている。

羨道は長さ238㎝、幅は玄室の入口で118㎝、羨門で70㎝を測り、玄室に近づくに連れて徐々に広がる形状を呈する。羨道の長さと幅からみて、本支群の中では、最も大きい造りであることがわかる。高さは天井壁と側壁の崩壊のため計測不可能である。羨門は二重構造を呈し、しっかりした構造であるが、閉塞等の施設は検出されなかった。

前庭は長さ488㎝、高さ78～162㎝を測り、非常に長く、羨門側でラッパ状に開く形状を呈する。壁は外傾している。床面には羨門から180㎝の位置に径70㎝、深さ12㎝の円形状の窪みと、その窪みから前庭入口に向けて、幅40㎝前後、深さ5～10㎝の細長い溝状遺構が検出された。この施設は排水溝と考えられる。

堆積した土層についてみると、前庭では明茶色土層上に黒茶色土層と遺物包含層の黒色土層が整然とした堆積を示している。羨道では、天井壁の崩壊土のために複雑な堆積となっている。玄室は天井壁が少しずつ剥離し、徐々に堆積していったものと思われる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄　室	鉄製品	直刀1	馬具1			
	須恵器	蓋6	坏8	小形高坏2	長頸壺1	平瓶1
前　庭	須恵器	蓋3	高坏1	提瓶1	甕片少数	

本横穴墓は、遺物の質、量ともに豊富で重要ではあるが、前述したように調査中にも落盤があり、遺物の出土位置等を充分に把握することはできなかった。

玄室からは、須恵器の蓋・坏合計14個体が玄室中央部から奥壁寄りで出土している。蓋は、口径12.2～13.4㎝の大形のものと、11.2～9.9㎝の比較的小形のものに分れる。これらはすべて天井部外面をヘラ切りの後不定方向の荒い指ナデ調整をしており、技法上の大きな変化はない。坏は口径10.6～8.1㎝の比較的小形のもので、技法の変化も見られ

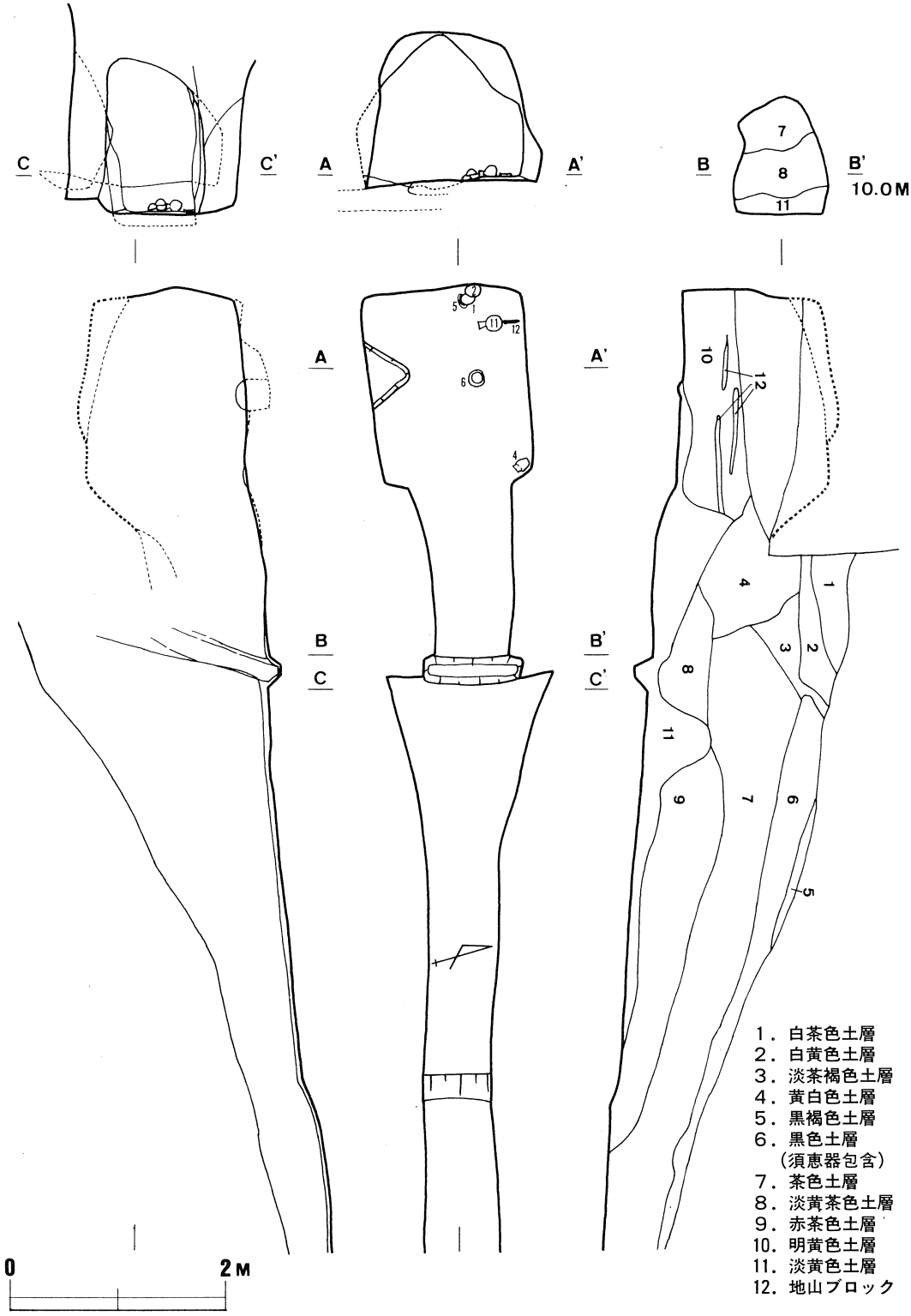

C
C'
A
A'
B
B'
10.0M
7
8
11
A
A'
B
C
B'
C'
1．白茶色土層
2．白黄色土層
3．淡茶褐色土層
4．黄白色土層
5．黒褐色土層
6．黒色土層
（須恵器包含）
7．茶色土層
8．淡黄茶色土層
9．赤茶色土層
10．明黄色土層
11．淡黄色土層
12．地山ブロック
0
2M

図７　４号横穴墓実測図

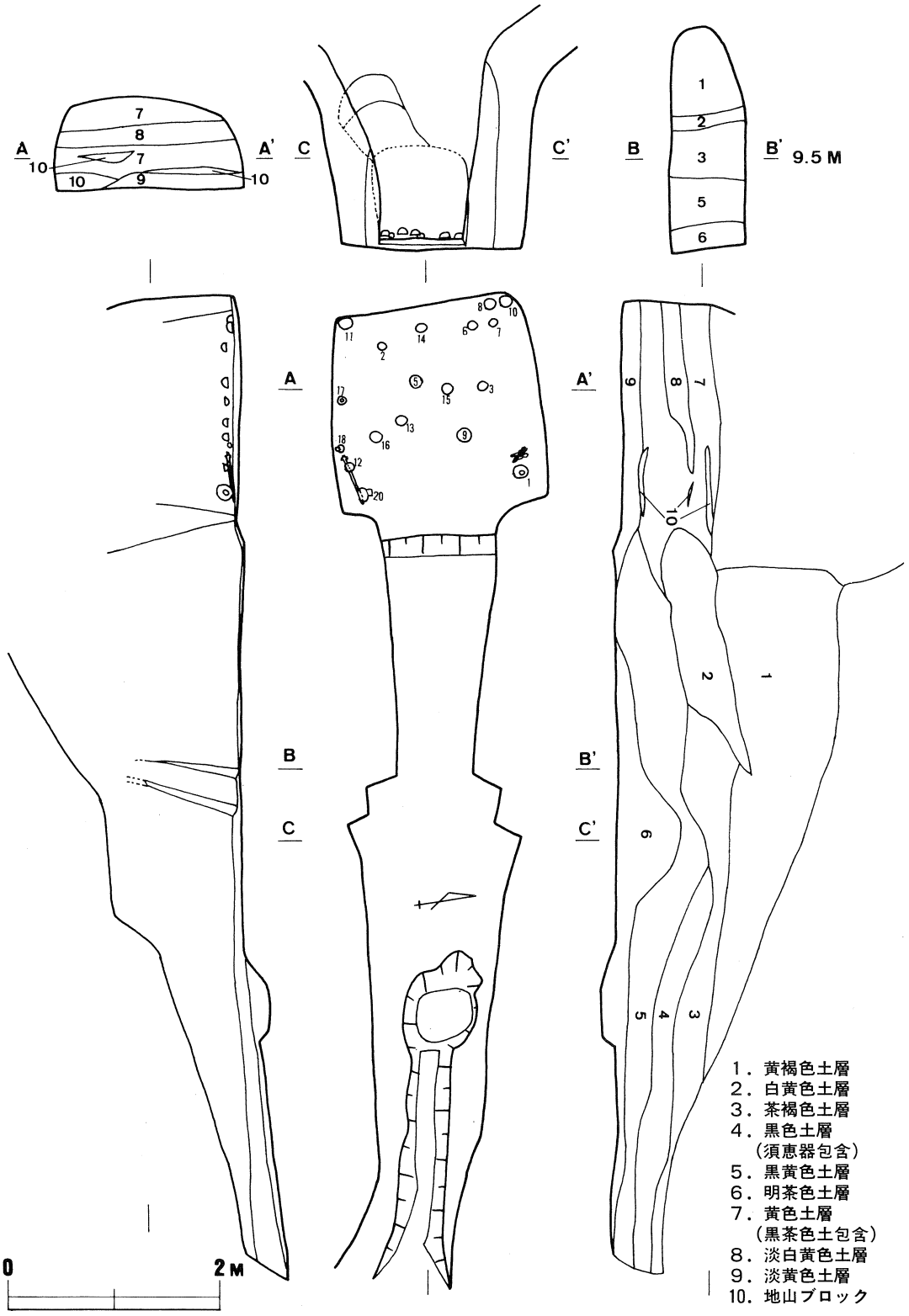

A
A'
B
B'
C
C'
9.5 M
0
2 M
1．黄褐色土層
2．白黄色土層
3．茶褐色土層
4．黒色土層
（須恵器包含）
5．黒黄色土層
6．明茶色土層
7．黄色土層
（黒茶色土包含）
8．淡白黄色土層
9．淡黄色土層
10．地山ブロック

図8　5号横穴墓実測図

ない。

小形高坏は玄室の右側から2個体が出土している。奥壁寄りの17が倒立し、18は横転した状態であった。

長頸壺は右前壁近くから口縁部を内側に向け横転した状態で出土し、平瓶は逆に左前壁近くより正立状態で出土している。

鉄製品としては、直刀と馬具がある。直刀は玄室の右前壁寄りで、切先を玄室入口に向け、ほぼ東西に置かれている。馬具は左側壁寄りで轡がN字形に錆着した状態で出土した。

この直刀と長頸壺、馬具と平瓶は出土状況から見て、セット関係になるものと思われる。

前庭からは、須恵器蓋・高坏・提瓶・甕が破片で出土している。これらは、黒色土層からのものが大半である。土師質土器も黒色土層より出土しており、(図版4－2）は底部に糸切痕をもつ。

(6) 6号横穴墓

本横穴墓は5号横穴墓の北側上方約2mに位置し、東南東に開口している。羨門部分の標高は11.5m であり、西支群の調査した中では最高所にあたる。玄室の保存状態は比較的良く、奥壁付近の天井壁が一部崩壊しているだけである。

玄室の平面プランは、奥行き338cm、横幅は奥壁付近で208cm、入口付近で182cm を測り隅丸でやや縦長の長方形状を呈する。奥壁は140cmまでは、やや内傾してたちあがり、側壁は内湾して丸い天井に至る。天井の形態は、いわゆるカマボコ形を呈する。床面は壁周辺に浅い溝が断続的にではあるが巡っており、排水溝の役割を果たしていたものと思われる。玄室内でそれが残存しているものは、西支群の調査した中では本横穴墓のみである。床面中央部に多少の凹凸があるのは、玄室がかなり長い期間空洞であったため、風化、浸水の影響のためと考えられる。

羨道は長さ122cm、幅は玄室の入口で72cm、羨門で62cmを測り、長方形を呈する。壁は60cm前後までやや内傾してたちあがり、天井はドーム状を呈し、最高部で高さ86cmを測る。

羨門には、閉塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ8cmを測る。前庭は全長550cmを測るが、羨門から246cmのところで約60cmの高い段をもつ。壁は外傾している。床面は、前庭入口から玄室に向ってやや急な上り勾配となる。

前庭では茶褐色土層、淡黄褐色土層、黒色土層が整然とした堆積を示していた。羨道から玄室にかけては、黒色土層が均等に広がり、その上に天井壁崩壊土が堆積していた。

玄室の奥壁には壁面を丁寧に掘削調整した工具の痕跡が残っている。奥壁の南寄りは横

方向、中央部は上から下への方向に削りが認められる。側壁、前壁は削りが浅く、剥離しているところもあるため判然としなかった。掘削調整の工具は、12～18㎝のノミ状のものを使用したと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄　室	銅製品	銅芯金貼耳環 4	
	鉄製品	刀子 4	
	須恵器	蓋 5	坏 5
羨　道	須恵器	広口壺 1	
前　庭	須恵器	蓋 1	瓶 1　小壺 1

玄室からは、蓋、坏が 5 個体ずつ出土している。蓋は口径11.8～13㎝、坏は9.6～11.1㎝で技法に違いは見られない。出土状況から蓋と坏それぞれ 4 と 8 、 2 と11、 5 と10、 3 と 9 、 6 と12の 5 組がセットになるものと思われる。

銅製品としては、玄室中央部から銅芯で金が若干残る耳環 4 個体が出土している。

鉄製品は刀子 4 振が玄室の中央部から左側壁寄りに出土しているが、いずれも破損している。

羨道からは、中央部の床面より広口壺が口縁部を玄室に向けて出土している。

前庭からは黒色土層と黄黒色土層より蓋、瓶と小壺が破片で出土している。

(7)　7 号横穴墓

本横穴墓は 6 号横穴墓の北側約 8.6 ㎞のところに位置し、東向きに開口している。羨門部分の標高は10㎞である。玄室の保存状態は非常に良い。床面には 7 ㎝前後の土が堆積し人骨も遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き 160 ㎝、横幅は奥壁付近で 112 ㎝、入口付近で 104 ㎝を測り長方形を呈するが、南側壁の入口付近が内側に入り込んでいるため、あたかも片袖式を思わせる造りである。奥壁は約26㎝まではやや外傾し、天井に近づくにつれて内湾する。側壁は 70 ㎝ 前後まではやや内傾し、丸天井に至る。奥壁付近の高さは58㎝、入口付近の高さは 92㎝を測り、奥に向って次第に低くなる形状を呈する。

羨道は長さ 96 ㎝、幅は玄室の入口で 66 ㎝、羨門で58㎝を測り、長方形を呈する。壁は40㎝前後までは内傾気味にたちあがり、丸い天井に至る。高さは玄室側で 69 ㎝、羨門側で80㎝を測り、奥壁に向ってやや低くなっている。羨門には閉塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ 9 ㎝を測る。

前庭は長さ 230 ㎝、幅は 76 ～ 94 ㎝を測り、比較的細く短かいものといえよう。床面は

羨門付近で外にくびれ、前庭入口直前まで次第に細くなり、入口部分で広がっている。

土層は、前庭から玄室にかけて整然と堆積している。羨門上の淡黄色土層は天井壁の一部が崩壊したものと考えられる。赤褐色土層は前庭から玄室にかけて堆積し、玄室内では有機質を多く含んだ土層となる。

玄室の奥壁、南北側壁、前壁には掘削調整の痕跡が認められた。奥壁の天井付近は右上から左下へ、床面付近は上から下へ削られている。北側壁では中央から奥壁に向けて、右から左の横方向に、南側壁では逆に左から右への横方向に削られている。前壁では、天井から床面に向けて曲線的に削られている。南・北側壁の奥壁に近い壁が奥壁によって抉られていた。これは前壁同様であったことから、南側壁・北側壁・奥壁・入口側の壁の順で削られていることがわかる。

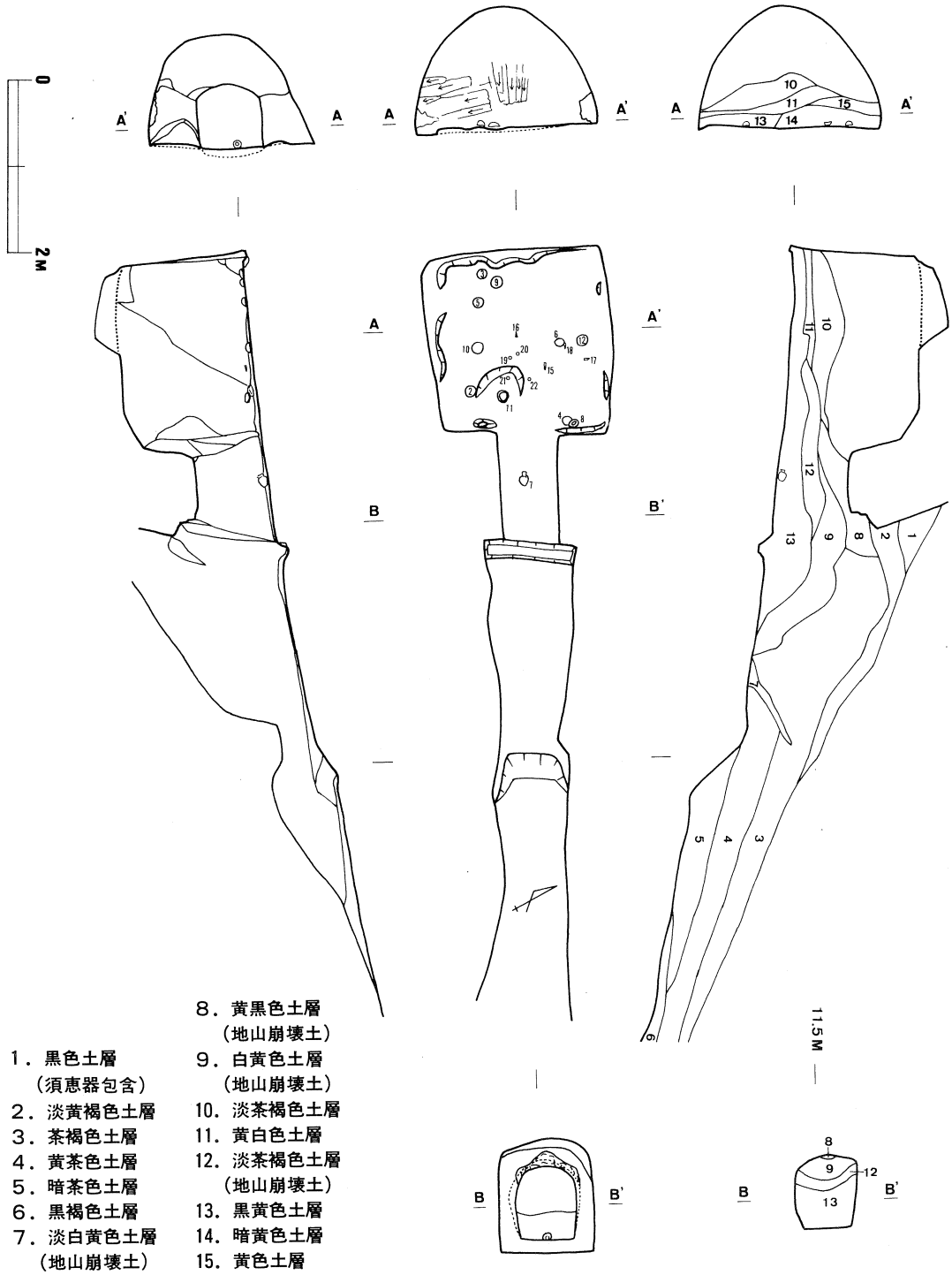
掘削調整の工具痕跡の幅は7～12㎝であり、削り面がU字状にくぼんでいた。これは、6号横穴墓の工具痕跡幅が12～18㎝であることから、横穴墓の規模の違いにより、工具の使い分けをしたのかもしれないと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄　室	須恵器	蓋1　坏1
前　庭	須恵器	蓋1

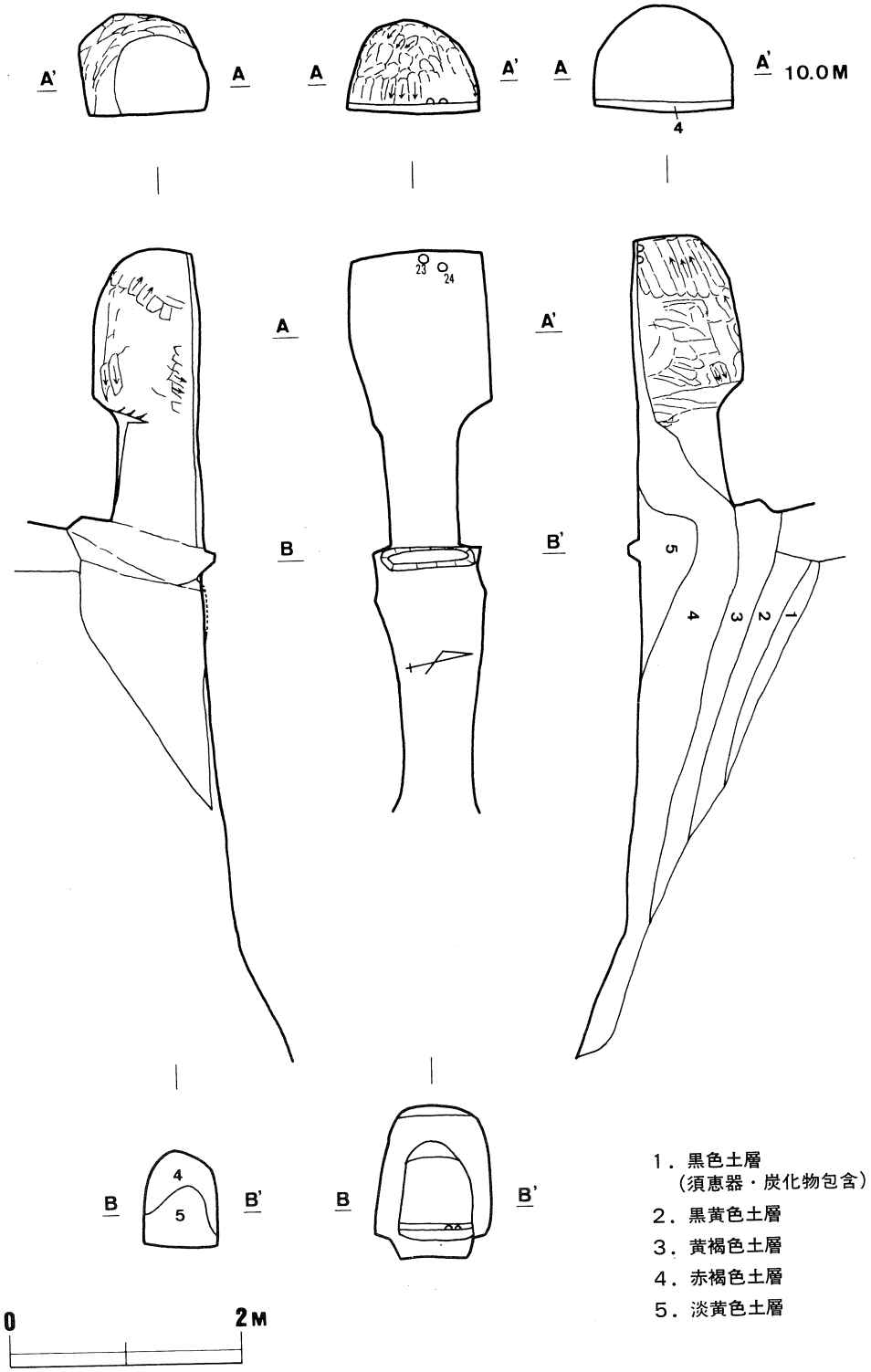
玄室の蓋と坏は奥壁際に伏せた状態で併置され、頭蓋骨の位置からみて枕の役割をしていたものと考えられる。蓋・坏ともに小形品で、セットになるものと思われる。これ以外に副葬品はなかった。

前庭では輪状つまみを有する蓋1片が黒色土層から出土した。



1．黒色土層
（須恵器包含）
2．淡黄褐色土層
3．茶褐色土層
4．黄茶色土層
5．暗茶色土層
6．黒褐色土層
7．淡白黄色土層
（地山崩壊土）
8．黄黒色土層
（地山崩壊土）
9．白黄色土層
（地山崩壊土）
10．淡茶褐色土層
11．黄白色土層
12．淡茶褐色土層
（地山崩壊土）
13．黒黄色土層
14．暗黄色土層
15．黄色土層

図9　6号横穴墓実測図



1．黒色土層
（須恵器・炭化物包含）
2．黒黄色土層
3．黄褐色土層
4．赤褐色土層
5．淡黄色土層

図10　７号横穴墓実測図

(8) 出 土 遺 物

土器　土器については、ここでは須恵器蓋と坏に関して概括することにする。なお、後出の観察表を参照されたい。

蓋坏の形態変化と技法上の特徴から下記の５つに分類した。

【Ⅰ類】　５号（図版３－１）、６号（図版５－１）

いずれも前庭出土である。

蓋の口縁部と天井部との境に稜がみられるが、これは２条の沈線をめぐらすことによって稜を浮かび上らせる手法である。天井部の外面はヘラ切り後、荒い指ナデ調整が施してある。

【Ⅱ類】　蓋２号（図版１－２）、３号（図版１－５）、４号（図版２－１・２）、５号（図版１－５）、６号（図版５－２～６）、坏２号（図版１－３）、３号（図版１－８・10）、４号（図版２－５・６）、６号（図版５－８～12）

（図版１－２）・（図版１－５）は前庭、その他は玄室から出土している。

蓋はⅠ類よりも稜は明瞭ではなく、天井部と口縁部との境いは浅い沈線や凹線でそれとわかる程度である。口縁部は内湾気味のものが多く、端部は丸みをおびる。

坏は内傾する立ち上り部がやや低く、端部はやや鋭い。受け部はやや斜め上方にのび、端部は丸みをもつ。

蓋・坏ともに外面はヘラ切り後の、(図版５－５）以外は指ナデ調整が施してある。

【Ⅲ類】　蓋５号（図版３－３・４・５・６・８）、７号（図版５－23）、坏１号（図版１－１）、３号（図版１－９・11）、５号（図版３－９～16）、７号（図版５－24）

器形が著しく矮少化し、口径は10㎝未満のものが多くなる。

蓋は口縁部が直行するものとやや外反するものがある。比較的前者に口径10㎝を越えるものが多く、天井部との境に凹線を１条もつものがある。

坏は立ち上り部が短く且つ内傾し、中には受け部より低いものもある。

蓋・坏ともに外面は丸みをおび、ヘラ切り後、未調整の（図版３－４・５）以外は荒い指ナデ調整が施してある。

【Ⅳ類】　７号（図版５－25）

前庭出土のもので輪状つまみをもつ破片である。

【Ⅴ類】　５号（図版３－７）

小形品である。口縁部と天井部との境は天井部のヘラ削りによって明瞭である。口縁部外面はやや肥厚し、端部はやや鋭い。短頸壷の蓋と考えられる。

Ⅰ類の須恵器を出土したものに5号、6号横穴墓、Ⅱ類に2～6号横穴墓、Ⅲ類に1号、3号、5号、7号横穴墓、Ⅳ類に7号横穴墓がある。これを陶邑の須恵器編年にあてはめると、Ⅰ類をⅡ型式第3・4段階、Ⅱ類をⅡ型式第5段階、Ⅲ類をⅡ型式第6段階、Ⅳ類をⅢ型式第1段階以降ととらえることができる。

金属製品　金属製品については、耳環、直刀、刀子、鉄鏃、馬具が出土しており、以下概要を記すことにする。

耳環は銅芯金貼で4個体が出土している。いずれも銅芯に薄い金メッキをしているが、金の残り具合は良くない。（図版5－19）は長径2.5㎝、短径2.3㎝、内径1.5㎝で、間隙は2㎜を測る。断面は楕円形で、長径0.7㎝、短径0.5㎝を測る。（図版5－20）は長径2.7㎝、短径2.5㎝、内径1.5㎝で、間隙は2㎜を測る。断面は楕円形で、長径0.8㎝、短径0.6㎝を測る。（図版5－21）は長径2.6㎝、短径2.5㎝、内径1.7㎝で、間隙は2㎜を測る。断面は楕円形で、長径0.8㎝、短径0.6㎝を測る。（図版5－22）は長径2.6㎝、短径2.4㎝、内径1.7㎝で、間隙は3㎜を測る。断面は楕円形で、長径0.8㎝、短径0.6㎝を測る。4個体は、その大きさ、断面の形より、対関係は検討できない。

直刀は1振が出土している。現存長37㎝を測るが、柄は欠損し関から刀身にかけてのみ残存している。全体は著しく銹化しているものの、関の断面、切先など細部にわたって観察できる。刀身は刃部断面が縦長の三角形で、造込みは平造りである。身幅は刀身基部で2.5㎝、中央部で2.4㎝を測る。脊は平脊で、脊幅は刀身基部で0.8㎝、中央部で0.6㎝切先側で0.5㎝を測る。

刀子は4本が出土している。（図版5－15）は現存長7.6㎝、身幅1.1㎝、棟幅0.4㎝を測る。切先と柄の一部が欠損している。（図版5－16）は現存長6.2㎝、身幅1.2㎝、棟幅0.3㎝を測る。刀身の半分以上が欠損している。柄部には木質が残る。（図版5－17）は現存長7.5㎝、身幅1.2㎝を測る。刀身の切先から刃部にかけて約2分の1が欠損している。関は径1.6㎝、幅1.1㎝を測り、柄部には木質が残る。（図版5－18）は現存長4.5㎝、身幅1.3㎝、棟幅0.4㎝を測る。関から柄部にかけて欠損している。

馬具は轡が1セット出土し、鉸具などの付属品は伴っていない。轡は鉄製素環の鏡板2枚に二連式の銜と左右の引手がN字形に絡み合い、銹着した状態で発見されている。銜は引手と直接連結され、鏡板の輪体も銜に連結される。鏡板は楕円形の輪体に立聞が付く形式のものであるが左右の形はやや異なる。輪体の幅は左側4.9㎝、右側5.4㎝を測る。立聞には横長の方形孔を有し、高さは左右とも1.4㎝、幅は左側2.1㎝、右側2.2 5㎝を測る。なお、左側の鏡板には長さ0.8×1.2㎝、厚さ0.5㎝の薄い鉄板が鍛接してあり、輪

体と立聞との興味ある接合方法である。銜は全長8.5㎝を測る。銜の引手側の輪体は1本の鉄棒の端部を折り曲げて輪とし、タクミ側の輪体は先端を二股に裂いて輪としている。引手は全長13.8㎝を測り、引手壷の幅は2.9㎝となる。引手も銜同様に輪体の作り分けをしており、銜側の輪体は二股式で、引手壷は折り曲げ式で作られている。このように、銜及び引手に最も圧力が加わり、傷みやすい輪体にその機能、役割に応じた作り方の工夫をみると全体的には華奢であるが、細部にはかなり手の込んだ跡が窺われる。

2. 平野高射砲陣地の調査

平野丘陵のほぼ中央部に、東西にはしる標高30m前後の丘陵がある。東西約150m、南北約30mのこの丘陵上には、太平洋戦争時に実際に使用したといわれる高射砲陣地が4基、蛸壷（1人用の塹壕）1基が築かれている。今回の調査の目的は古墳の確認にあったが、結果的には図らずも高射砲陣地の地下構造を知り得るところとなった。

高射砲陣地の地下構造というのは、上部構造として高射砲あるいは高射機銃を備え付け、固定するための重要な基礎となる地下の仕組みである。調査した高射砲陣地は3基で、最も西側にある高射砲6号陣地から30m東側に高射砲7号陣地、さらに45m東側に高射砲8号陣地が存在する。蛸壷は高射砲7号陣地の東側約10mの位置にある。

最も遺存状態の良い高射砲7号陣地は、土塁を含めた直径8mの円壕である。表土下約1mの床面に長さ3.4m、幅20㎝前後の角材を井げた状に組み、交わった所をボルト及びナットで固定した台木が見つかった。床面の周囲の2か所の小空間は、緊急塹壕用であろう。

さて、斐川町の西部に位置する出西地区には、戦時中の海軍基地である「出西飛行場」跡が今でも残されている。「終戦間際には何度も敵機の攻撃を受けたものです。」と地元の人はいう。また、当時平野丘陵の谷間を飛行機の格納庫にする計画もあったとされる。敵機襲来の一つの証拠として、新川通り（旧新川）に架かる鉄橋に、敵機の攻撃を受けた弾痕跡が現在も生々しく残っている。それを迎え撃つために、この平野丘陵の高射砲陣地では幾度かの発砲もしたそうである。

3. 平野間樋

平野間樋は、平野丘陵西側の高瀬川から丘陵内の水田への用水路として掘削されたものである。全長は約60m、西側入口の幅は6m、東側出口の幅は5mを測り、内部は通行可能ではあるが、天井部にはかなりの剥落が見られる。1893年（明治26年）に浚渫計画

があったという記録が残存しているが、開通当時の新川、高瀬川との関係は不明である。なお、高瀬川が開通した1676年（延宝5年）にまで逆上ることはないと推定できる。また斐川町には、斐伊川と高瀬川を結ぶ「出西間樋」が存在し、各河川、用水路等に多量の水を給していた。平野間樋は、その用水路の一つにすぎないが、その開通に際しては、地域住民による相当の労力が必要であったろうと推測できる。なお、本間樋の機能は本事業に伴う開発により昭和58年に消失した。

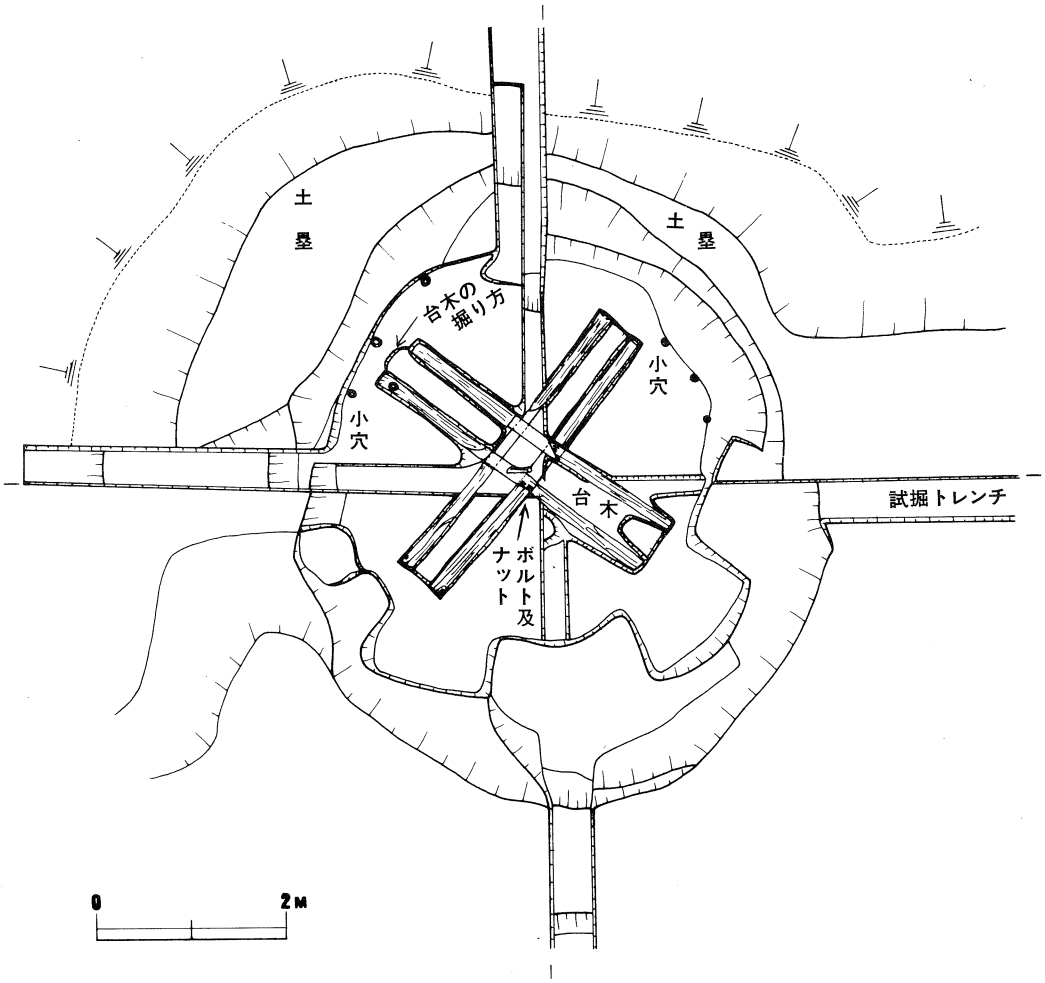


図11　平野７号高射砲陣地実測図

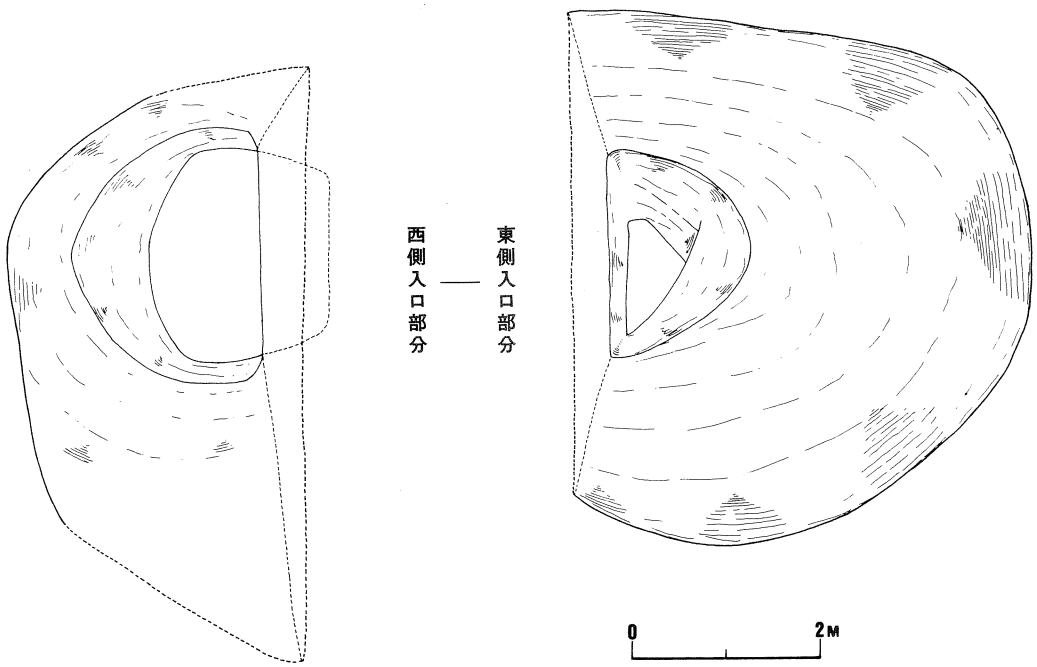


図12　平野間樋略図

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査で明らかとなった問題点を列記してまとめとする。

1. 今回は７穴の横穴墓を調査したが、未調査区域の予想される10穴を含めると17穴以上の横穴墓が存在していたことが推定される。今後、これらの横穴墓を営んだ集団の解明が必要とされる。また、丘陵頂部に存在する三角点古墳や平野丘上古墳群との関連性も検討されなければならない。

2. 横穴墓は群構成をなすのが一般的であるが、それは幾つかの小単位の集まりで構成されているといえよう。本支群の場合も同様で、横穴墓の立地、規模、出土遺物から２、３の単位を推定することが可能である。しかし、調査した７穴だけで結論を出すことはできず、次回報告される東支群の群構成を把握したうえで考察していく必要があろう。註1.

3. 本支群の形態的特徴は、まず前庭が比較的長く、羨道もそれに比例して長いことである。羨門は４号、５号横穴墓のみ二重構造で、他の横穴墓とは異質な造りを思わせる。玄室の平面形態は一般的に方形の縦長プランで、玄室の横断面は６号、７号横穴墓は丸天井である。

   以上のことが挙げられるが、前庭から羨道が長いのは、地形が緩やかな上に地山（真砂土）が柔かいため、玄室を造り出すのには地山の奥深くまで掘ることが必要であったためであろう。

4. 横穴墓の築造年代を考えるにあたっては、前述した出土須恵器の編年観から７世紀初頭に開始され、中葉には最盛期を迎え、後半には築造を終了したものと考えられる。しかし、例えば、Ⅰ類の蓋にみられる稜は前段階の手法が残るが、天井部外面にヘラ切り後の指ナデ調整が施されていること、また玄室からⅡ類が一括して出土する４号、６号横穴墓、Ⅲ類が一括して出土する１号、７号横穴墓との時間的な差など出雲地方における須恵器編年に関する懸案の課題が多く、今後の研究に期待するものである。註2.

5. 現代の遺跡ともよぶべき高射砲陣地と間樋の調査も行った。古代・中世だけでなく、近現代のこういった遺構も将来的には貴重な文化遺産になると思われたからである。

註1.　「発掘と地域の歴史像の発展」（柏書房『考古資料の見方<遺跡編>』、1977年）

註2.　『陶邑Ⅲ』（大阪府教育委員会、1978年）

V　出土人骨鑑定

鳥取大学医学部法医学教室
助教授　井　上　晃　孝

(1)　6号横穴墓出土人骨

玄室内には、土器の配置からみて4～5体が埋葬されたと推定されるが、残存骨が極めて少なく、小さな骨片化しており、資料としては不適当である。

玄室の土器の配置から番号をつけると、A、B、C、D、Eとなり、その周囲の人骨について検討する。（図13.）

A：小さな頭骨片1個と床砂中より歯牙4個を検出したのみである。

歯牙は小臼歯1個、大臼歯3個で、すべて永久歯であり、咬耗度はMartin の分類では2～3°に相当し、年令は壮年（30才代）が推定される。性別、身長は不明である。

B：残存骨は全く検出されない。

C：金環が散在するが、残存骨、歯牙は全く検出されない。1体が埋葬されたと推定される。

D：刀子1本があり、残存骨は少ないがこの玄室内では最も多い。

骨の配置は極めて不自然である。残存骨は右側頭骨（錐体部）、左右不明の上腕骨片、大腿骨と脛骨の一部である。

性別は不明であるが、年令は骨の大きさから一応成人が推定されるが、身長は不明である。

E：刀子2本をおいて、下方に骨片2個と左右不明の上腕骨片の一部が残存するのみである。性別・年令・身長は全く不明である。

まとめ　6号横穴墓内には、須恵器、刀子と金環が散在し、その配置から数人が埋葬されたと推定される。

残骨量は極めて少ない。わずかの残存骨の配置からして3体分が確認されたにすぎない。

A：性別不明、年令は壮年、身長は不明である。

D：性別不明、年令は一応成人、身長は不明である。

E：性別、年令、身長ともに不明である。

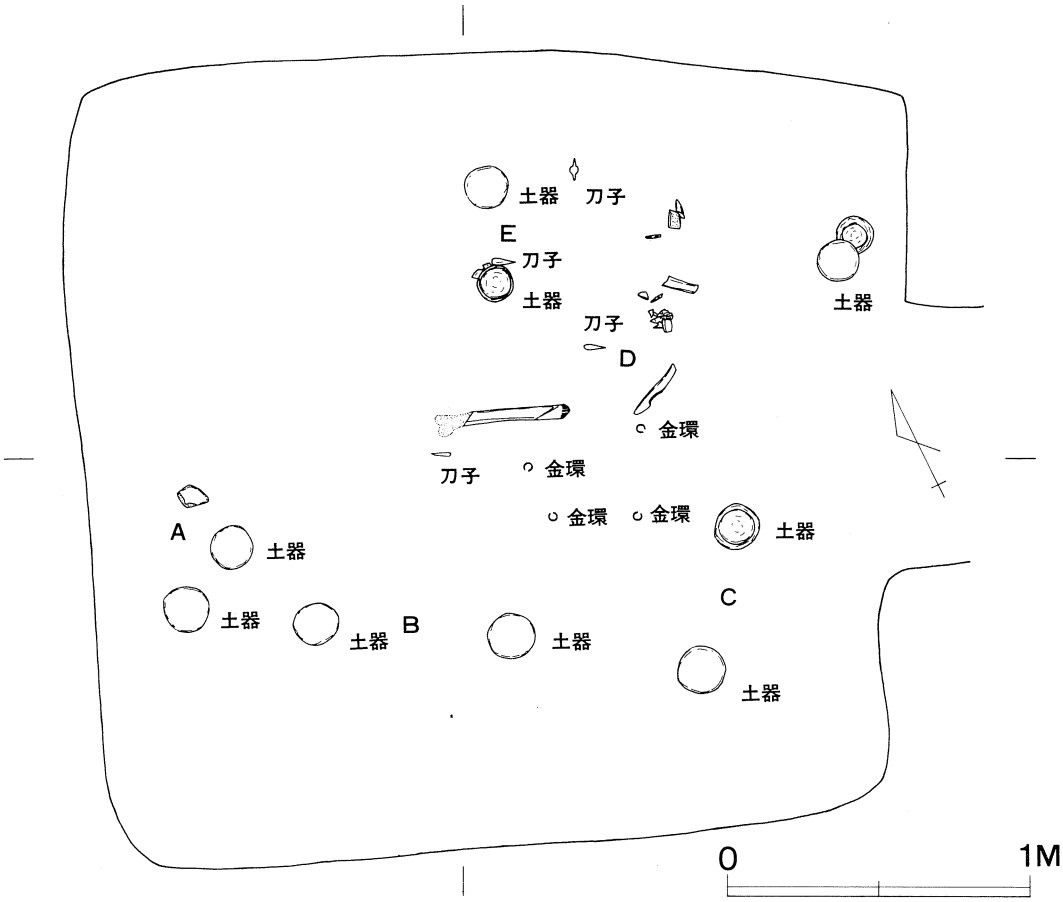


図13　6号横穴墓人骨出土状況

(2)　7号横穴墓出土人骨

1.　はじめに　玄室内には保存状態が比較的良好な人骨が残存していた。

残存骨の配置は極めて不自然であるが、1体が埋葬されたことが確認された。この出土人骨について、性別・年令・身長・血液型について報告する。

2.　出土人骨の概観　7号横穴墓内には頭骨と4肢骨、その他の骨が散在していた。埋葬時に自然位で安置されると、骨は骨格順に一定の方向性をもち、左右対称的に残存（一部消失骨はあるにしても）するのであるが、本横穴墓の人骨配置は極めて不自然である。（図14.）

椎骨（頸骨・胸骨・腰骨）、胸郭骨・上肢骨、下肢骨の残存骨をみると、骨の一定の方向性（近位部～遠位部配列）と左右対称性は全くなく、白骨化した段階で、後日かなり無雑作に骨を移動した形跡がみられる。

骨の表面の色調は、黄白色～黄褐色調を呈し、骨質は極めて脆弱なものから、比較的堅いものまであるが一般的に脆い。

骨を採取後、骨格順に再配列してみると、欠損、消失骨はあるが、重複した骨は検出されず、1体が埋葬されたことが確認された。（第1表）

3. 残存骨　頭蓋骨は保存状態がよく、ほぼ完形に近いが、頭蓋底部を欠いている。（写真1.）上顎骨には一部歯牙が付着し（写真2.）、下顎骨は右の犬歯の歯槽部から左下顎全体が残存し、歯牙が付着している（写真3.）。その他遊離歯牙も認められ、歯式に従って示すと第2表の通りである。

歯牙はすべて永久歯で、第3大臼歯が萌出しかかっている。歯牙の咬耗は切歯、犬歯、臼歯とも極めて軽度で、Martinの分類では0～1°である。

頸椎骨は1～7頸椎骨であるが、残存骨はそのうち3個で、第2頸椎骨（軸椎）のみが完形である。胸椎骨は1～12胸椎骨があるが、そのうち6胸椎骨が残存しているが完形のものはない。

腰椎骨（1～5腰椎骨）のうち4個残存するが、うち2個はほぼ完形である。仙骨、尾骨はない。

胸郭……胸骨柄、胸骨体、剣状突起は欠、肋骨は若干残存するが完形のものはなし。

上肢骨…肩甲骨は左右とも関節窩と肩峰部、その周囲のみ残存。鎖骨は右のみ完形で長さ10㎝と小さい（成人♂14㎝、♀13㎝）。上腕骨は左右とも残存するが近位部（上腕骨頭部）が欠落している。橈骨は左右とも近位部～骨体部が残存するが遠位部を欠落している。尺骨は左右とも遠位部を欠く、手骨は左右とも全くない。

下肢骨…寛骨は左右とも腸骨があるが極めて小さい。恥骨は左右とも欠落、坐骨は右のみ残存、大腿骨は左右とも骨体部を中心に残存するが、近位部と遠位部を欠く。

膝蓋骨は右のみ残存。脛骨は左右とも骨体部を中心に残存するが近位部と遠位部を欠く、腓骨は左のみ残存（遠位部）、足骨は左右の踵骨と距骨のみ残存。

人骨の計測値（単位：㎜）

頭蓋最大長：170.3　頭蓋最大巾：138.5　最小前頭巾：92.0

最大前頭巾：114.0　上顔巾：100.0　上顔高：64.2　両耳巾：102.0

頬弓巾：112.0　両眼窩巾：91.5　眼窩高：29.2　眼窩巾：36.8　口蓋巾：36.0

鼻高：49.0　鼻巾：23.5　上腕骨：左228.0 右230.0　大腿骨：右330.0

脛骨：270.0

4. 性別の推定　性別判定には、形態学的検査と人類学的計測値による判定法がある。

頭蓋骨は完形ではないが、検査できる範囲内で検討する。

1）頭蓋骨の形態学的検査

前頭結節……中等度に発達

オルトメトピカ（額鉛直型）……やや鉛直に近い

眉弓の隆起……発達弱い

眉間の隆起……発達弱い

頬弓巾……やや狭い

以上の形態学的特徴は女性骨が一般に具備している条件であるので、本屍骨は女性であると推定する。

2）頭蓋骨の対照値との比較

3の頭蓋骨の計測値はかなり小さく、全般的に女性域の範囲に属する。

3）頭蓋骨の判別関数法による性別判定

埴原（1964）の頭蓋骨の計測値による判別関数による性別判定法に従って算出する。

$Y = X_1 + 0.2207X_2 + 1.0950X_4 + 0.5043X_5$

X_1（頭蓋最大長）170.3㎜　　X_2（頭蓋最大巾）138.5㎜

X_4（頬骨弓巾）112.0㎜　　X_5（上顔高）64.2㎜

判別限界値より計算値が大きいと♂、小さいと♀と判別する。

結　果

判別限界値	資料骨計算値	判　　定
380.8439	355.8830	女性(♀)

以上1）、2）、3）の各法ともいずれも女性と判定される結果をえた。

5. 年令の推定

1）頭蓋冠縫合

頭蓋冠の3大縫合の冠状、矢状、人字縫合とも全く癒着が認められないことから25才以下の若年者が推定される。その上、本尾の頭蓋冠の前頭縫合はすでに幼児期に癒着するのが普通であるが、例外として全く癒着を認めない。

2）歯牙の萌出と咬耗

① 歯牙の萌出……残存歯牙はすべて永久歯で、表2.に残存歯牙を示す。第3大臼歯はすべて歯冠部のみで、歯根部の形成がなく、右上、左下の3個は歯槽内にとどまっている。（第3大臼歯の萌出は17（18）才～25才まで）

② 歯牙の咬耗……咬耗はほとんどみられない。とくに臼歯の場合、咬頭の咬耗は極めて軽度でMartin の分類では0～1°で、切歯、犬歯でも同様である。

3）上顎骨の切歯縫合

切歯縫合は25才前後で始まり、30才前後に癒着が終るといわれているが、本資料では全くみられない。その他の横口蓋縫合、正中口蓋縫合も癒着は全く認められない。以上から年令は20才前後と推定されるが、10代後半の可能性がより強い。

6. 身長推定 生前の身長推定は完全な4肢骨（長管骨）の最大長に性別、各骨別に指定された相関係数を乗じて算出する。

本尾の4肢骨は完形のものはないが、比較的保存良好な骨について欠損部分を考慮して最大長を算出し身長を推定する。

資料骨			骨の最大長mm	藤井法	工藤法	Pearson法
骨名	性	左右		（1.960）	（1.961）	（1.899）
上腕骨	女	左	228	135.5	—	134.8
		右	230	136.0	—	135.4
大腿骨		右	330	135.0	138.5	130.7
脛骨		左	270	136.9	136.1	136.9
平均値				135.9	137.3	134.5

以上から生前の身長は大約136.0 cm位と推定する。

7. 血液型

1）資料……歯牙：右下顎第1小臼歯（ $\overline{4|}$ ）

資料を粉末化し、脱脂処理後固定して検査に供した。なお、対照として血液型既知の歯牙も同様に処理して検査に供した。

2）抗体

抗A、抗B血清は市販品、抗O（H）レクチンはUlexeuropaeus種子の抽出液を用いた。未処理血球に対する凝集素価は抗A、抗B血清は1：256、抗Hレクチンは1：64 であった。パパイン酵素処理血対に対しては、抗A、抗Bとともに1：1,280、抗Hレクチンも1：1,280になるように調整した。

3）抗体解離試験

資料として歯牙粉末約10mgを用いた。抗体感作時間は室温5 hr、さらに室温で1夜

行った。洗浄後解離液はPBSを加え、55℃10min 熱解離後解離液を別の小試験管に移し、指示血球（未処理血球、処理血球）を加えた。さらに、37℃10min放置後、遠沈し、肉眼的、光顕的に凝集の有無で判定した。

結果、第3果に示すように未処理血球ともにB型と判定される結果をえた。

8. 骨の不自然な配列について 残存骨を骨格順に配列してみると、消失骨はあるが、ほぼ1体分に相当し、重複した骨がみとめられないことから明らかに1体が埋葬され、追葬のあとが全くない。

伸展葬の場合、骨は生前の体形に従い骨格順に一定の方向性のある配列をするのに本屍骨の配列は極めて異状である。

頭骨のすぐ下にくる筈の下顎骨が遠く離れて位置し、椎骨、上肢骨、下肢骨、骨盤らの位置もかなり上下、左右に方向性もなくばらばらに散乱している。

これらのことを考えた場合、後日白骨化した時期に何らかの目的で人為的に移動されたことは確実である。

9. まとめ 本横穴墓内には比較的保存状態の良好な人骨が極めて不自然な配列で残存していた。

1. 埋葬者は1名である。
2. 埋葬者の性別は女性、年令は20才前後であるが10代後半の可能性がより強い。身長は136㎝位と推定され、血液型は歯牙からB型と判定された。
3. 残存骨には特記すべき病変らの異常を認めない。

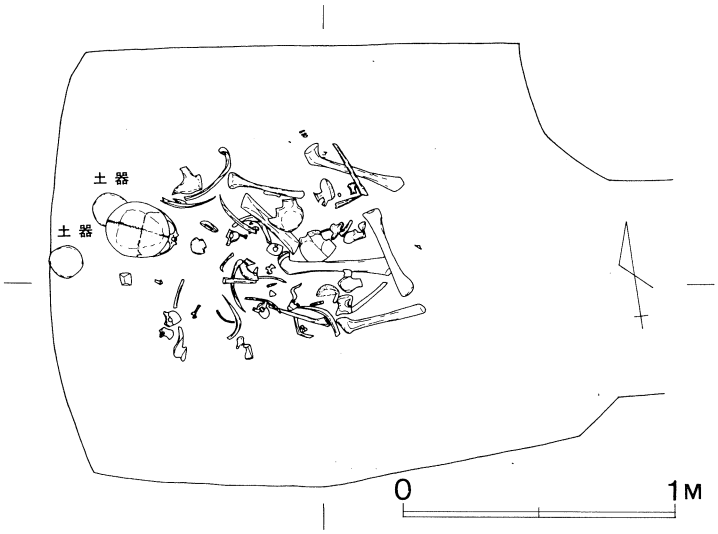


図14 7号横穴墓人骨出土状況

第1表　残存骨一覧

骨格		骨数	本屍骨	備考
頭蓋骨	頭蓋骨	1	○ ほぼ完形に近いが顎蓋底部を欠く	
	下顎骨	1	○ ほぼ正中から左側は残存（右側欠）	
椎骨	頸椎骨	1 ～ 7	○(3)軸椎のみ完形、他は破損	
	胸椎骨	1 ～12	○(6)破損	
	腰椎骨	1 ～ 5	○(4) 2 個のみ完形、他は破損	
	仙骨	1 ～ 5	欠	
	尾椎骨	1 ～ 3(5)	欠	
胸郭	胸骨柄	1	欠	
	胸骨体	1	欠	
	剣状突起	1	欠	
	肋骨	12対	○（若干）　左右とも完形なし	
上肢骨	肩甲骨	1 対	○（1 対）　関節窩と眉峰部のみ	
	鎖骨	1 対	○（右のみ）完形	
	上腕骨	1 対	○（1 対）　左右とも近位部欠	
	橈骨	1 対	○（1 対）　左右とも遠位部欠	
	尺骨	1 対	○（1 対）　左右とも遠近位部欠	
	手骨	1 対	欠	
下肢骨	寛骨	1 対	○（1 対）　腸骨（左右）と坐骨（右）のみ	
	大腿骨	1 対	○（1 対）　左右とも遠近位部欠	
	膝蓋骨	1 対	○（右のみ）完形	
	脛骨	1 対	○（1 対）　左右とも遠近位部欠	
	腓骨	1 対	○（左のみ）遠位部のみ残存	
	足骨	1 対	○（左のみ）踵骨と距骨のみ	

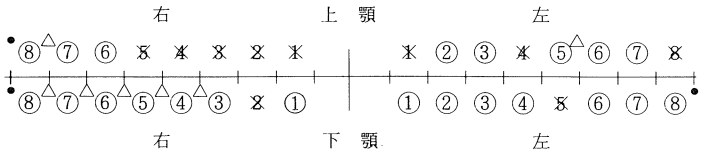
○：一部でも残存していて、その名称のはっきりしているもの
（ ）：（ ）の中の数字は残存骨数
欠：欠落骨（消失骨）

第2表　歯式

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8
第三大臼歯	第二大臼歯	第一大臼歯	第二小臼歯	第一小臼歯	犬歯	側切歯	中切歯	上顎 右側 左側	中切歯	側切歯	犬歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一大臼歯	第二大臼歯	第三大臼歯
8	7	6	5	4	3	2	1	下顎	1	2	3	4	5	6	7	8

さらにこれを番号だけにすると

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8



○△：残存歯牙（付着歯牙）
○△：残存歯牙（遊離歯牙）
○•：残存歯牙（埋没歯牙）
×：欠落歯牙

第３表　血液型検査結果（抗体解離試験法による）

資料＼血球抗体			未処理血球			酵素処理血球			判定
			抗 A	抗 B	抗O(H)	抗 A	抗 B	抗O(H)	
歯牙(右下顎第1小臼歯：$\overline{4}$)			−	＋	−	−	＋＋	＋	B型
対照	血液型既知	歯牙　A型	＋	−	−	＋＋＋	−	＋＋	A型
		歯牙　B型	−	＋	−	−	＋＋＋	＋＋	B型

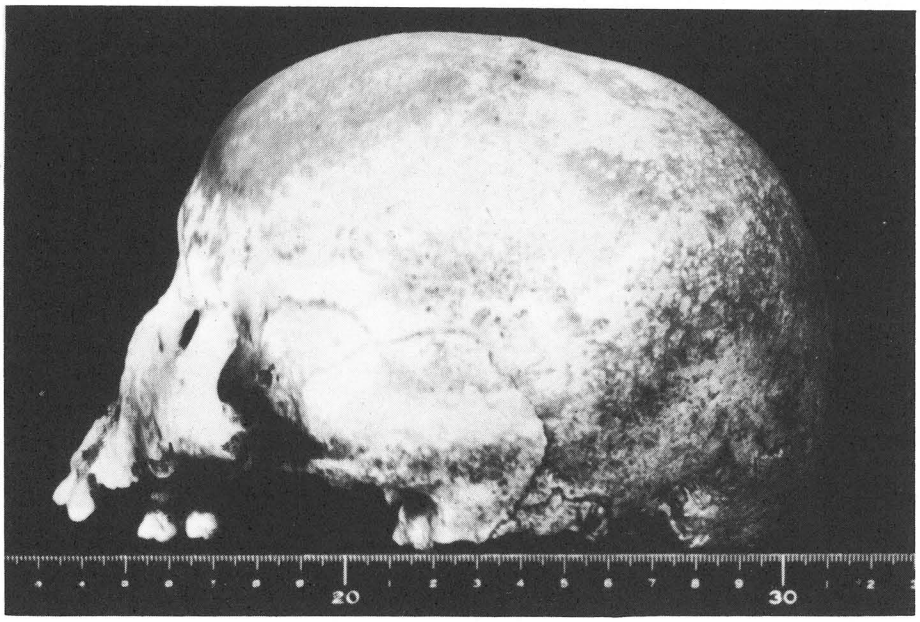


写真１　　頭蓋骨（左側頭部）

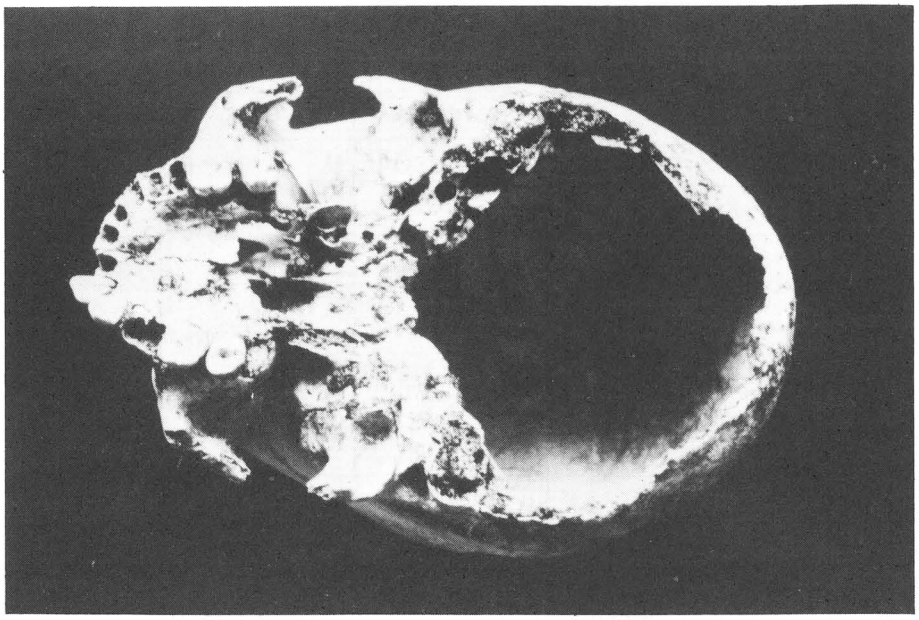


写真２　　上顎骨歯牙付着状況

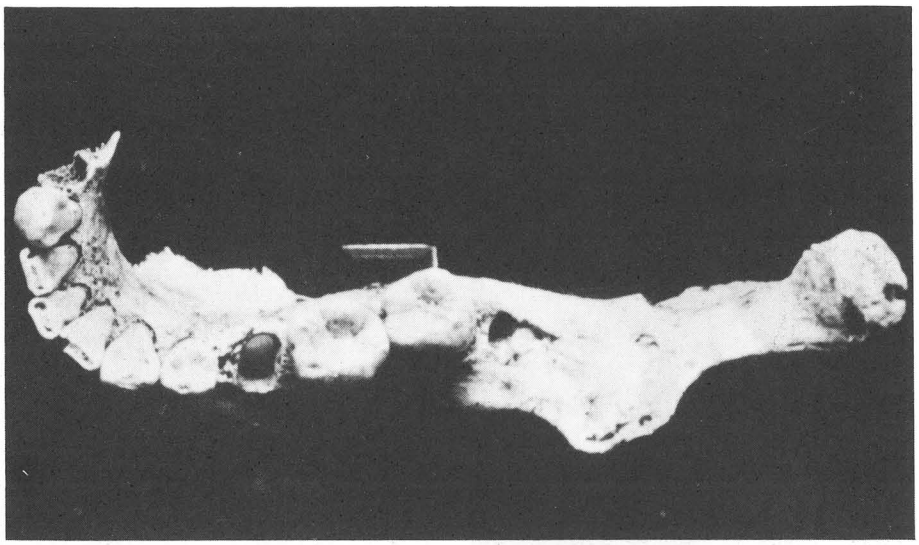
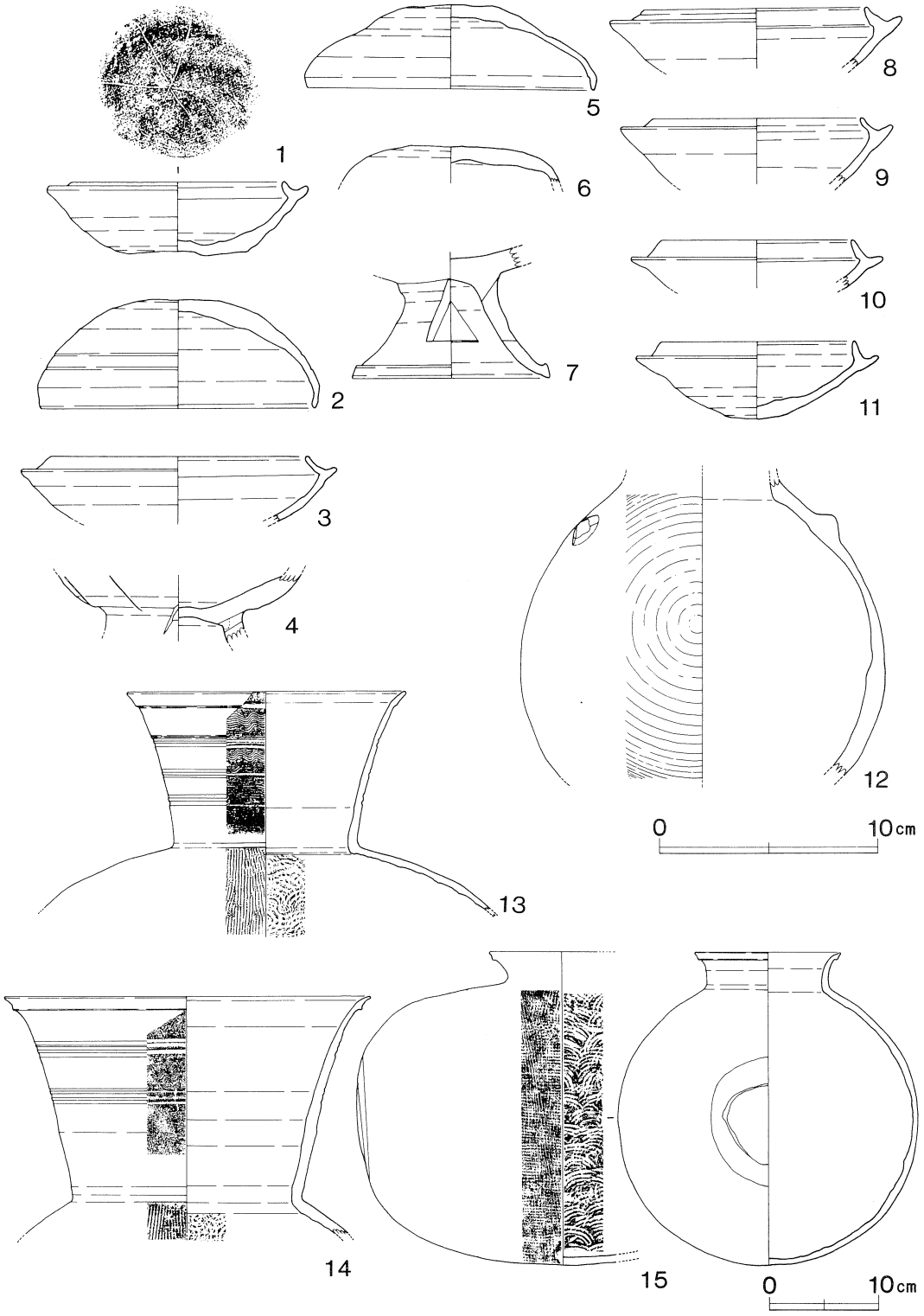
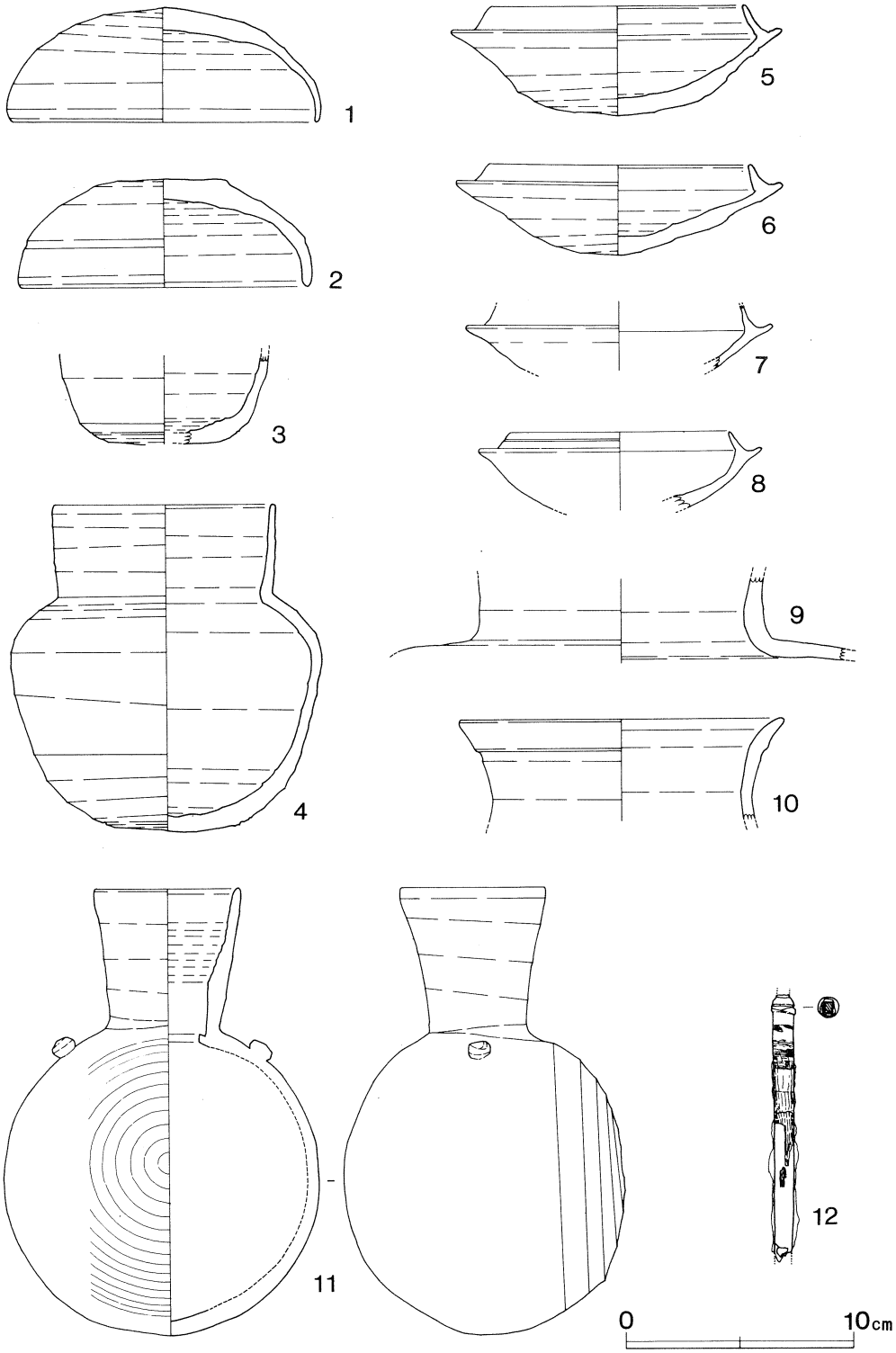


写真３　　左下顎歯牙付着状況

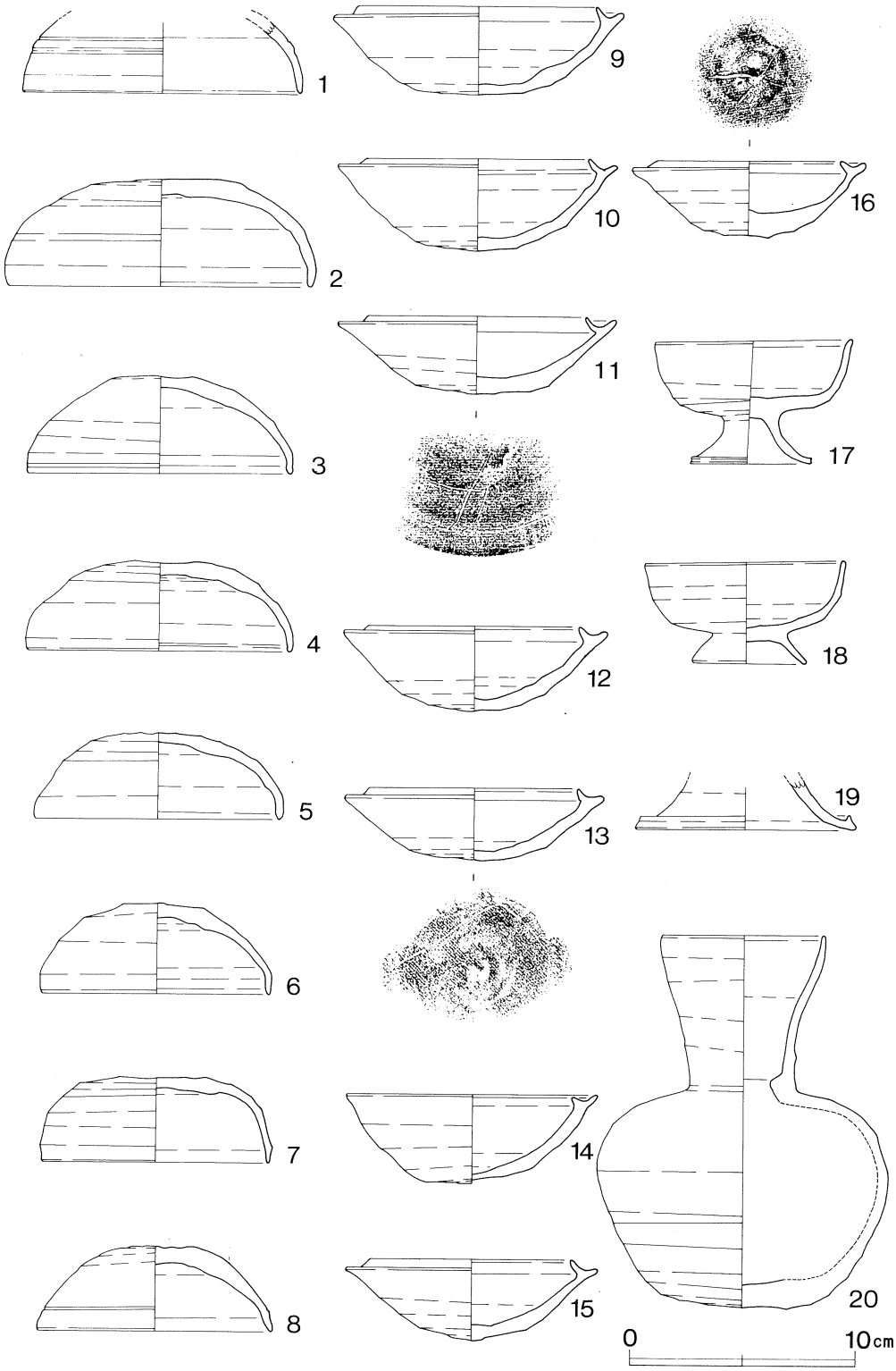
図　　版



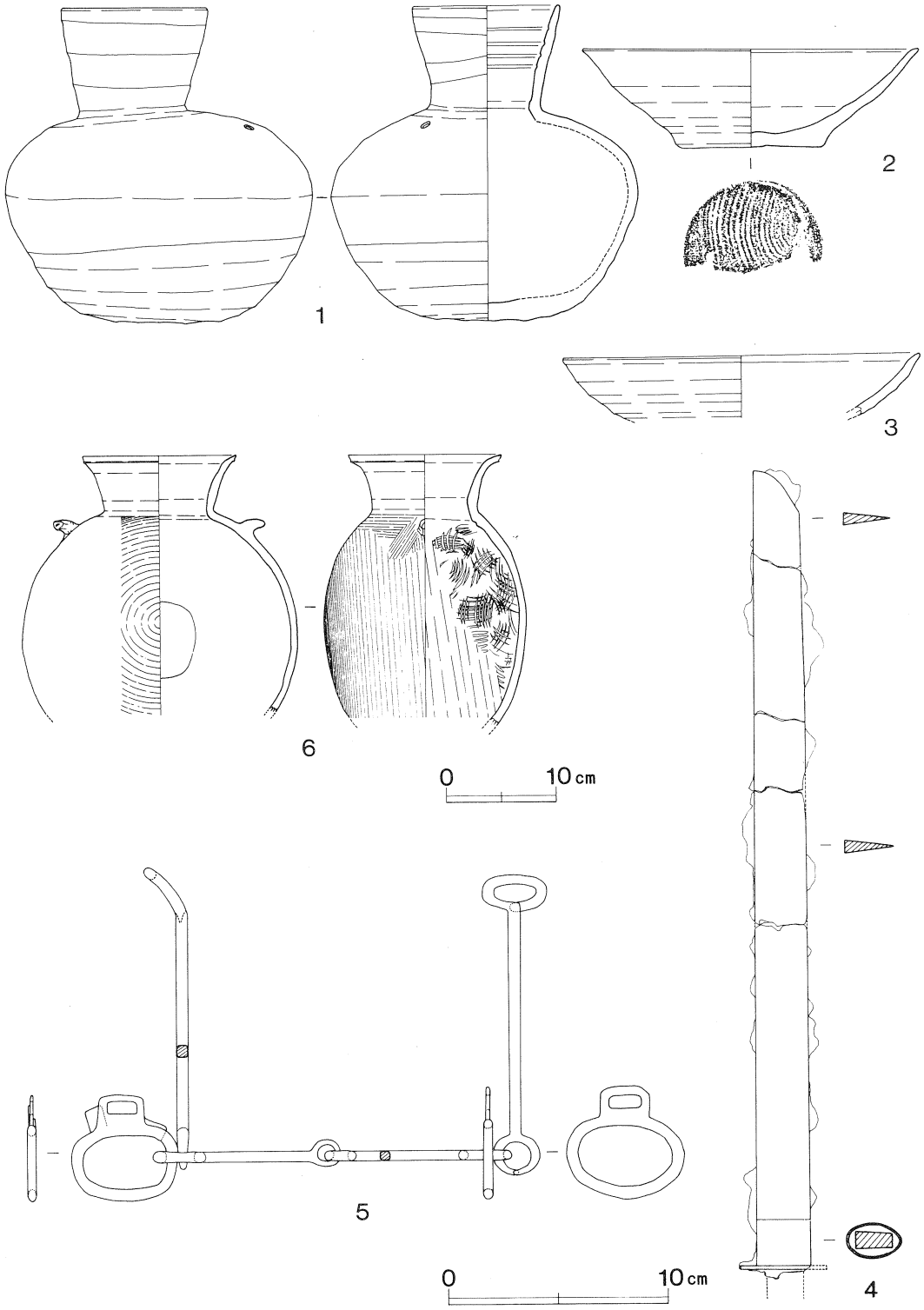
1号(1)、2号(2～4)、3号(5～15)横穴墓出土遺物実測図(13～15は1/6、他は1/3)



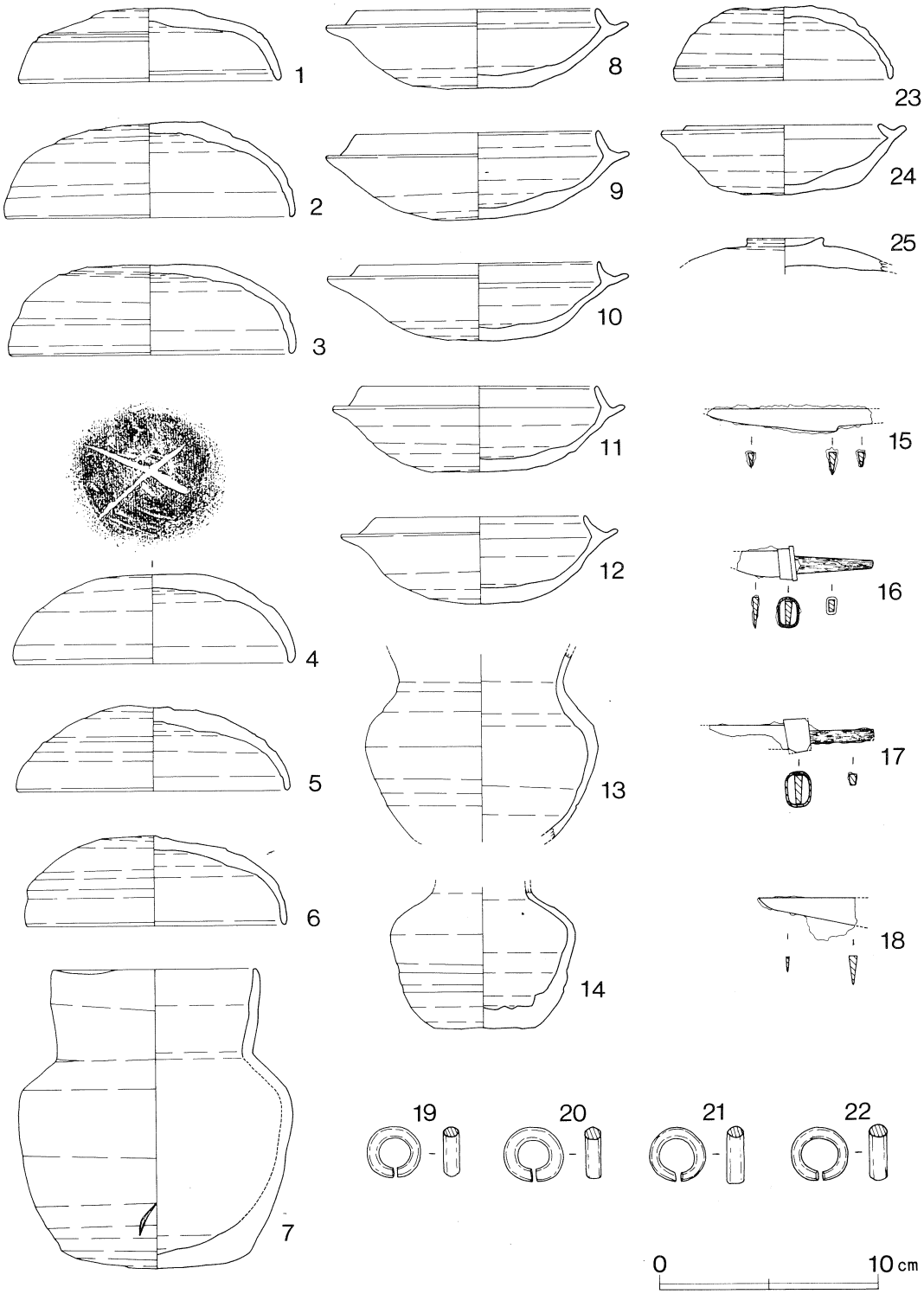
４号横穴墓出土遺物実測図（1/3）



５号横穴墓出土遺物実測図（1/3）



５号横穴墓出土遺物実測図（６は⅙、他は⅓）



6号(1～22)、7号(23～25)横穴墓出土遺物実測図(1/3)

出土土器観察表

図版6

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
1号横穴墓	蓋坏 （身）	1－1 30－1	口径：9.7 器高：3.15	内傾する短かい立ち上り部は、端部が丸く、やや斜め上方にのびる。受け部は端部が丸くふくらむ。立ち上り部と受け部との高さの違いはあまりない。 弓状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面は、ヘラ切り後粗いナデ。 底部内面は、指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 底部内面に「⊻」のヘラ記号有り。 玄室出土。
2号横穴墓	蓋坏 （蓋）	1－2 30－2	口径：12.4 （推定）	大形で、口縁端部は丸く、内側に丸味をもつ。口縁部はゆるやかに内湾し、天井部に至る。 口縁部と天井部の境に、2条の沈線をもつ。	天井部外面は、ヘラ切り後ナデ。 内面は仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：ヤヤ粗 3㎜以下の白色砂粒含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土。
	蓋坏 （身）	1－3 30－3	口径：11.8 （推定）	内傾するたちあがりは、端部を丸くおさめる。 受部はほぼ平らで、端部を丸くおさめ底体部につながる。 底体部との境に指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部1/6残存。 前庭堆積土出土。
	高坏	1－4		大型で、無蓋のものと考えられる。 脚は3方向三角形の透しの割りつけを残す。	坏部・底部内面は、仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：ヤヤ粗 3㎜以下の砂粒含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色
3号横穴墓	蓋坏 （蓋）	1－5	口径：13.1 器高：3.9	大形で、口縁部は丸く、内側に1条の沈線をもつ、口縁部はゆるやかに内湾して天井部に至る。 天井部は、ほぼ平らである。	天井部外面は、ヘラ切り後粗いナデ、内面は、指による不定方向ナデ仕上げ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：暗青灰色 2/3残存。前庭堆積土出土。
	蓋坏 （蓋）	1－6		天井部は、ほぼ平らになる。	天井部外面ヘラ切り後、粗いナデ。 内面不定方向ナデ仕上げ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：普通 色調：灰色 天井部のみ1/3残存。 前庭堆積土出土。

	器　種	図版番号 写真番号	法　　量	形　　態	技　　法	備　　考
3号横穴墓	高　坏	1－7 30－7	底径：10.0	短脚１段、２方向に三角形の透し。 底縁部上端はたちあがる。	坏部底部は、仕上げナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密２㎜以下の白砂含む。 焼成：良好 色調：暗灰色
	蓋　坏（身）	1－8	口径：10.0（推定）	内傾するたち上りはやや高く、端部は丸い。 受部は斜め上方にのび、端部を丸くおさめ底部にいたる。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 1/6残存。 前庭堆積土出土。
	蓋　坏（身）	1－9	口径：9.5（推定）	内傾するたち上りはやや外湾し、口縁端部は鋭い。 受部は、斜め上方にのび、端部を丸くおさめて、底体部に至る。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部1/5残存。 前庭堆積土出土。
	蓋　坏（身）	1－10	口径：8.8（推定）	内傾するたち上りは高く、端部は丸い。 受部はほぼ水平で、端部を丸くおさめ、底体部に至る。 底体部との境に指による凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部1/6残存。 前庭堆積土出土。
	蓋　坏（身）	1－11	口径：8.8 器高：3.6	内傾するたち上りはやや高く、端部は鋭い。 受部は斜め上方にのび、端部を丸くおさめて、底体部に至る。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 1/8残存。 前庭堆積土出土。
	提　瓶	1－12	体部最大径：16.8	中型でつまみが両肩につく。	体部外面は、前後面ともカキ目、内面はナデ。	胎土：密 ２㎜以下の白砂粒含む。 焼成：良好 色調：黒灰色
	甕	1－13 30－5	口径：25.6（推定）	大形で、口縁端部は丸く外反する。 頸部は長く、内傾しながら肩部に至り、２条の凹線が３ケ所に入り、間に５～10条の波状紋が入る。	肩部から体部にかけて、外面タタキ目（1.8㎝×2.8㎝７条）、内面あて木目（半径2.8㎝７条の同心円）が残る。 頸部は、回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部～肩部にかけて1/3残存。 前庭堆積土出土。
	甕	1－14	口径：33.4（推定）	大形で口縁端部は丸く外反し、頸部との境に凸帯をもつ。 頸部は長く、３条の沈線が２ケ所に入りその間に18～24条の	口縁部から頸部は回転ナデ。 肩部外面タタキ目（2×2.5㎝７条）内面あて木目（半径３㎝６条）ロクロ回転	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部から肩部が1/3残存。 前庭堆積土出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
3号横穴墓	甕			波状紋をもつ。	方向不明。	
	横瓶	1－15 30－6	口径：13.4 （推定） 器高：29.25	大きく外反する口縁部は、端部は鋭く、二重口縁となる。 頸部は短く、体部は俵形。	胴部外面タタキ目（1.5㎝前後7～9条）と斜行目文（8～10㎝、6～7条） 内面はあて木目（半径2㎝7条）他は回転ナデ。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 ½残存。 前庭堆積土出土。
4号横穴墓	蓋坏（蓋）	2－1 30－8	口径：13.8 器高：5.05	内湾して端部を丸くおさめた口縁部と、弓状を呈する天井部との境は、不明瞭である。 器壁は薄く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋坏（蓋）	2－2 30－9	口径：12.5 器高：4.8	やや内湾して端部を丸くおさめた口縁部と中心部が平らで、次第に弓状になる。 天井部との境に1条の沈線をもつ。 器壁は厚く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒色タールを多く含む。 焼成：普通 色調：暗灰色 玄室出土。
	瓶	2－3		底部は平らで、外傾しながら体部にいたる。 底部内面に2本の凸線をもつ。	底部外面ヘラ削り、他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 底部から体部にかけて⅓残存。 前庭堆積土出土。
	広口壺	2－4 30－12	口径：8.7 器高：14.5 体部最大径：13.6	垂直にのびる頸部は比較的長く、口縁部は、端部がやや鋭い。 短く弓状を呈する肩部と体部との間に、最大径をもつ。 底部は丸く、弓状を呈する。	底部から体部下半にかけての外面は、ヘラ削り。 底部内面は、指ナデ。 他は回転ナデ。調整ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 2㎜程度の砂粒を少量含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋坏（身）	2－5 30－10	口径：10.0 器高：4.85 受部径：14.7	内傾する立ち上り部は、端部がやや内湾して鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部が丸く、立ち上り部との境に1条の沈線をもつ。 底部は丸く、やや深い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
4号横穴墓	蓋坏（身）	2－6 30－11	口径：11.4 器高：4.0 受部径：14.35	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。斜め上方に短かくのびる受け部は、端部を丸くおさめる。底部外面と口縁部との境に浅い凹線をもつ。底部は丸く浅い。	底部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒色タールと石英を含む。焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。外面の一部に自然釉付着。
	蓋坏（身）	2－7	受部径：13.5（推定）	立ち上り部は内傾する。受部は、やや斜め上方にのび、端部を丸くおさめて底部につながる。底体部との境に、指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：普通 色調：灰色 口縁部のみ⅕残存。前庭堆積土出土。
	蓋坏（身）	2－8	口径：9.6（推定） 受部径：12.3（推定）	内傾する立ち上り部は、端部が鋭い。受部はほぼ水平にのび、端部を丸くおさめる。底体部との境に指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 口縁部のみ¼残存。前庭堆積土出土。
	甕	2－9		頸部はやや外反する。肩部はやや斜めになる。器厚は薄い。	頸部は回転ナデ。肩部外面は、タタキ目。内面にあて木目が残る。	胎土：密 3㎜以下の白色砂粒を含む。焼成：普通 色調：暗青灰色 頸部から肩部を中心に破片でわずかに残る。前庭堆積土出土。
	甕	2－10	口径：14.2（推定）	外反する口縁部は、端部を丸くおさめる。頸部との境に1条の凸線をもつ。	回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部のみ⅛残存。前庭堆積土出土。
	提瓶	2－11 30－13	口径：6.3 器高：19.8 体部最大径：13.8	やや外反してのびる頸部に、内湾する口縁部がつづき、端部はやや鋭い。体部から底部にかけて球状を呈し、体部中央で、最大径をなす。肩部に乳頭状の耳が1対とりつく。	体部の片面は、ヘラ削り後、回転ナデ。他面は、回転ナデ。頸部は回転ナデ。	胎土：やや粗 石英、長石を含む。焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5号横穴墓	蓋坏 （蓋）	3－1	口径：12.2 （推定）	口縁端部は丸く、ゆるやかに内傾しながら天井部に至る。 口縁部と天井部の境に幅1㎜の浅い沈線をもつ。	回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部のみ¼残存。 前庭堆積土出土。
	蓋坏 （蓋）	3－2 31－1	口径：13.4 器高：5.8	外拡がりにのび、端部を丸くおさめた口縁部と丸みをおびた天井部との境は、明瞭でない。 器高は高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 黒色タールを含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面の一部に自然釉付着。
	蓋坏 （蓋）	3－3 31－2	口径：11.5 器高：4.4	垂直にのび、端部を丸くおさめた口縁部の内面には、1条の沈線を有する。 丸みをおびた天井部と口縁部の境は明瞭ではない。 器高はやや低い。 内面は口縁部に浅い沈線を有す。中心から外へ3㎝付近が最厚8㎜である。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 後に板状のもので、引っかいている。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 4㎜ほどの砂粒を少量含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉付着。
	蓋坏 （蓋）	3－4 31－3	口径：11.5 器高：3.95	やや外拡がりにのび端部をやや鋭くした口縁部と丸みをおびた天井部との境に1条の太い凹線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭出土。
	蓋坏 （蓋）	3－5 31－4	口径：11.1 器高：3.85	外拡がりにのび、端部を丸くおさめた口縁部と、丸みをおびた天井部との境は明瞭でない。 器高はやや低い。	天井部外面の⅔はヘラ削り。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
	蓋坏 （蓋）	3－6 31－5	口径：9.9 器高：4.05	垂直にのび、端部を丸くおさめた口縁部と、くぼみをもつ天井部との内面の境に凹線を有す。 器高はやや低い。 最大器厚は、中心から外へ2㎝前後で9㎜となる。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面はていねいな指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面の一部に自然釉付着。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5号横穴墓	蓋	3－7 31－6	口径：9.9 器高：3.8	やや外拡がりに長くのび、端部をやや鋭くおさめた口縁部の内面に1条の浅い凹線を有し、外面は肥厚する。丸みをおびた天井部と口縁部との境は、かすかな稜線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面½は、ヘラ削り。内面は、一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黒色タール多数付着。 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。
	蓋坏 （蓋）	3－8 31－7	口径：10.4 器高：3.8	外拡がりにのび、端部をやや丸くおさめた口縁部の内面に、浅い凹線を1条有す。丸みをおびた天井と口縁部との境は、浅い沈線1条を有す。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黒色タール多数付着。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋坏 （身）	3－9 31－8	口径：10.55 器高：4.0 受部径：12.8	内傾する立ち上り部は、端部が鋭い。やや斜め上方にのびる受部は端部を丸くおさめている。 底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉付着。
	蓋坏 （身）	3－10 31－9	口径：9.8 器高：4.1 受部径：12.4	内傾する短かい立ち上り部は、端部がやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。 底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋坏 （身）	3－11 31－10	口径：9.55 器高：3.5 受部径：12.4	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の指ナデ。 板状のもので引っかいた痕跡がある。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 黒色砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面に「⫽」のヘラ記号あり。
	蓋坏 （身）	3－12 31－11	口径：9.4 器高：3.75 受部径：11.7	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部は、やや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。 底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、粗い指ナデ。 内面は指ナデ調整、他は回転ナデ。 ロクロは左回転	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面の¼に茶色のサビ付着

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5号横穴墓	蓋坏（身）	3－13 31－12	口径： 9.2 器高： 3.25 受部径：11.6	内傾する立ち上り部は非常に短かく端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器厚は低い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。 板状のもので引っかいた痕跡がある。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
	蓋坏（身）	3－14 31－13	口径：8.7 器高：4.0 受部径：11.2	内傾する極端に短い立ち上り部は、つまみ出した程度で、やや斜め上方にのびる受け部より低い。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面は、ヘラ切り後指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。 外面全体に自然釉付着。
	蓋坏（身）	3－15 31－14	口径：8.8 器高：3.65 受部径：11.2	内傾する短かい立ち上り部は、端部が鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部は丸く器高は低い。	底部外面は、ヘラ切り後ナデ調整するが凸が残り、調整が悪い。 内面は一定方向の指ナデ。	胎土：やや粗 黒色タールを少量含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。 外面に「／」のヘラ記号あり。
	蓋坏（身）	3－16	口径：9.2 器高：3.35 受部径：10.3	内傾する極短に短かい立ち上り部は、つまみ出した程度で、端部は鋭い。 やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。 底部は、弓状を呈し器高は低い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面は回転ナデ調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。
	小形高坏	3－17 31－15	口径：8.6 器高：5.4 底部径：5.6	外拡がりにのびる坏部の口縁端部は、やや鋭い。 低く短かい脚部、下半は「ハ」の字状に拡がり、端部は面を有す。	坏部底部外面は、ヘラ削り。 底部内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
	小形高坏	3－18 31－16	口径：8.6 器高：4.5 底部径：5.1	外拡がりにのびる坏部の口縁端部は丸みをもつ。 脚部は「ハ」の字状に直接坏部底部にとりつき、端部はやや鋭い。	坏部底部外面は、ヘラ削り後回転ナデ調整。 底部内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5号横穴墓	高坏	3－19	底部径：9.6 （推定）	短脚で外面は底端部より内傾する面をもつ。 内面は内湾する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 脚部¼残存。 前庭堆積土出土。
	長頸壺	3－20 31－18	口径：7.2 器高：16.6 体部最大径： 13.0	やや外傾してのびる頸部は長く、内傾する口縁端部はやや鋭い。 短かく弓状を呈する肩部と体部との間に最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底部にかけてヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
	平瓶	4－1 31－17	口径：6.5 器高：14.45 体部最大径： 14.0	やや外傾してのびる頸部は、やや短い。 内傾する口縁部は、丸みをおびている。 内面に3条の沈線を有す頸部は、胴部の中心よりやや横にとりつく。 2つの竹管状のくぼみをもつ肩部と体部の間に最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底部にかけてヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 3㎜以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	台付坏身（土師質土器）	4－2	口径：15.3 （推定） 器高：4.5	低い台から外傾しながら口縁部にいたる。 口縁端部は丸みをおびている。 底体部にわずかながら3条の稜が認められる。	底部内面は仕上げナデ。他は回転ナデ。 底部に静止糸切り痕を残す。 ロクロ回転方向不明。	胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：赤黄色 ⅓残存。 前庭堆積土出土。
	台付坏身（土師質土器）	4－3	口径：17.3 （推定）	口縁端部は丸く、やや外反しながら口縁部に続く。 口縁部には4条の指による凹線が認められる。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：普通 色調：赤色 口縁部のみ¼残存。 前庭堆積土出土。
	提瓶	4－6 30－4	口径：13.8 体部最大径： 25.0	大型で、口縁部は2重口縁で、耳は片方しか残っていない。 体部は耳のつく方向に長い。	口縁・口頸部は内外とも回転ナデ。 胴部外面は、両面ともカキ目（片面170～190条）。 内面は張り付け痕が円形に残る。 片面はあて木目（同心円文）が残る。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 3㎜以下の砂粒含む。 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 ⅓残存。 前庭堆積土出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6号横穴墓	蓋坏 （蓋）	5－1	口径：11.85 （推定） 器高：3.4 （推定）	大形で口縁端部はやや丸みをもち、内側に幅2㎜の沈線1条をもつ。 口縁部は鋭く立ちあがり、天井部に至る天井部との境に幅2㎜の沈線をもつ。 天井部はほぼ平たい。	天井部外面ヘラ切り後、粗いナデ。 内面不定方向の指ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：黄灰色 ⅓残存。 前庭堆積土出土。
	蓋坏 （蓋）	5－2 32－1	口径：13.0 器高：4.3	外拡がりで、端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境にかすかに稜線をもつ。 天井部の中程には1条の凹線がラセン状に入る。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗 4㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土。
	蓋坏 （蓋）	5－3 32－2	口径：12.7 器高：4.1	やや外拡がりにのび端部を丸くおさめた口縁部と、弓状を呈し、中心部がやや平らな天井部との境にわずかな稜線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後未調整。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
	蓋坏 （蓋）	5－4 32－3	口径：12.9 器高：4.1	外拡がりで端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境は不明瞭である。 天井部中央は平らである。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切後粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：普通 色調：淡赤灰色 玄室出土。 天井部外面に「×」のヘラ記号あり。
	蓋坏 （蓋）	5－5 32－4	口径：12.2 器高：3.8	外拡がりで、端部を丸くおさめた口縁部の内面に1条の沈線をもつ。 天井部は丸みをおび口縁部との境に2条の凹線が入る。 器高は低い。	天井部外面はヘラ切り後、指ナデ。 天井部内面は、一定方向のナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。
	蓋坏 （蓋）	5－6 32－5	口径：11.8 器高：4.15	外拡がりで、端部を丸くおさめた口縁部の内面に1条の沈線をもつ。 天井部は丸みをおび口縁部との境に1条の浅い沈線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後、粗い指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6	広口壺	5－7 32－11	口径：9.35 器高：13.65 体部最大径：12.6	やや外反する頸部は比較的長く、口縁部は内傾して、端部は丸みをもつ。 肩部は短かく体部との間に最大径をもつ。 底部はやや平らである。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4㎜以下の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：淡黄灰色 羨道出土。 肩部から頸部にかけて一部自然釉付着。
号	蓋坏（身）	5－8 32－6	口径：11.0 器高：3.15 受部径：13.3	内傾する立ち上がり部は、やや短く、端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを微量に含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土。
横	蓋坏（身）	5－9 32－7	口径：11.05 器高：4.0 受部径：13.6	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。受け部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、丁寧な指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4㎜以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
穴	蓋坏（身）	5－10 32－8	口径：10.9 器高：3.55 受部径：13.6	内傾する立ち上り部は、やや短く、端部は鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後、指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。
	蓋坏（身）	5－11 32－9	口径：10.75 器高：3.95 受部径：13.35	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は丸みがある。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを少量含む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面に自然釉が一部に付着。
墓	蓋坏（身）	5－12 32－10	口径：9.55 器高：4.0 受部径：12.3	内傾する立ち上り部は、端部がやや外反して鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は丸みがあり、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを含む。 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。 全体に歪んでいる。

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6号横穴墓	小壺	5－13		頸部から肩部にかけて、逆「く」の字形になり体部にいたる。 体部はやや内湾する。	頸部から肩部回転ナデ。 体部ヘラ削り。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 頸部から体部¼残存。 前庭堆積土出土。
	甕	5－14		肩部は外傾し、体部にいたる。 体部に2条の沈線が入る。 底部は平らである。	底部外面ヘラ切り後ナデ仕上げ。 他は回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 3㎜以下の白砂粒含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 肩部から底部が½残存。 前庭堆積土出土。
7号横穴墓	蓋坏（蓋）	5－23 32－13	口径：9.8 器高：3.4	外拡がりで肩部を丸くおさめた口縁部と丸みをおびた天井部との境に、指による凹線をもつ。 器高は低い。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 天井部内面は、指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 外面に油脂付着。 玄室出土。
	蓋坏（身）	5－24 32－14	口径：8.9 器高：3.2 受部径：11.2	内傾する短い立ち上り部は端部が丸い。 やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめ、立ち上り部と受け部との高さの違いは、極くわずかである。 弓状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 外面に油脂付着。 玄室出土。
	蓋坏（蓋）	5－25 32－12		環状のつまみがつき天井部はやや内湾する。 器厚は厚い。	天井外面ヘラ削り。 内面は不定方向仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗青灰色 つまみと天井部の¼残存。 前庭堆積土出土。

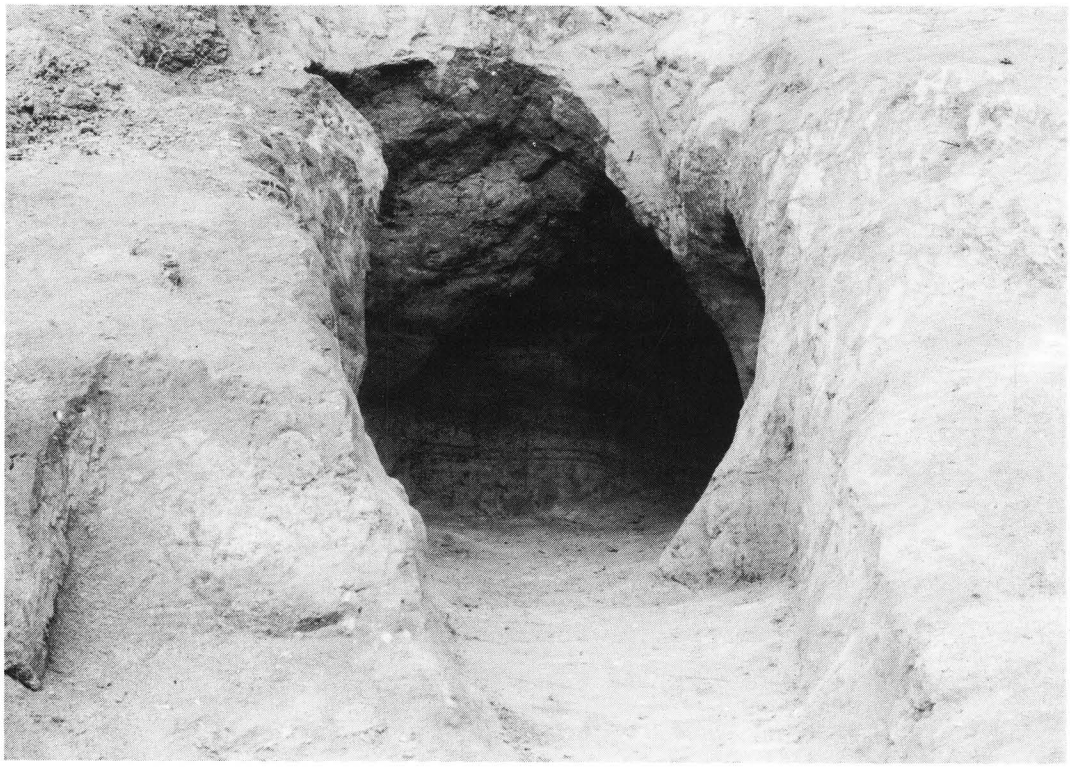
平野遺跡群周辺の航空写真（1平野西横穴墓群，2平野東横穴墓群 3～5高射砲陣地，6・7平野間樋）南より

平野横穴墓西支群近景

1号横穴墓羨門閉塞状況（東から）

1号横穴墓前景（東から）

２号横穴墓玄室堆積土層（東から）

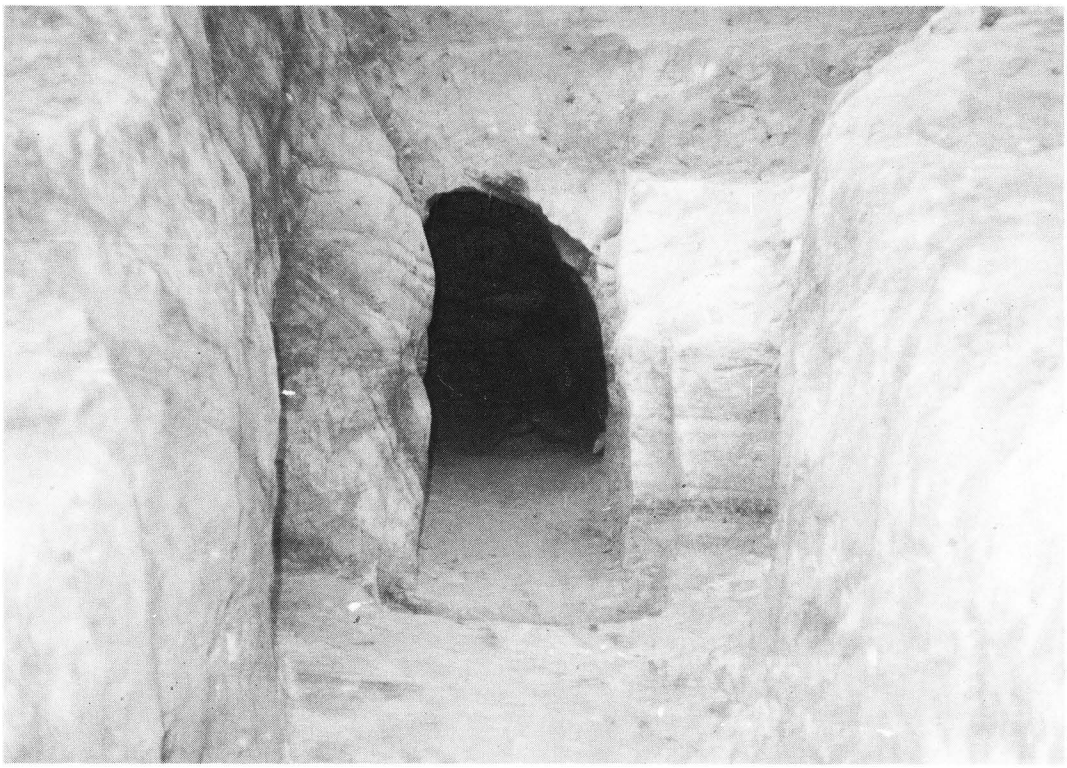


２号横穴墓前景（東から）

3号横穴墓遺構検出状況（南から）

3号横穴墓前庭部（東から）

4号横穴墓遺構検出状況（東から）



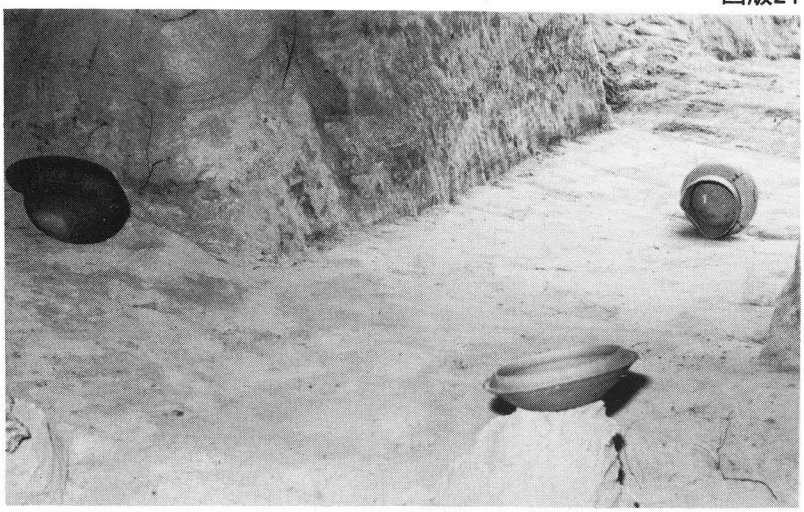
4号横穴墓前景（東から）

5号横穴墓羨道堆積土層（東から）

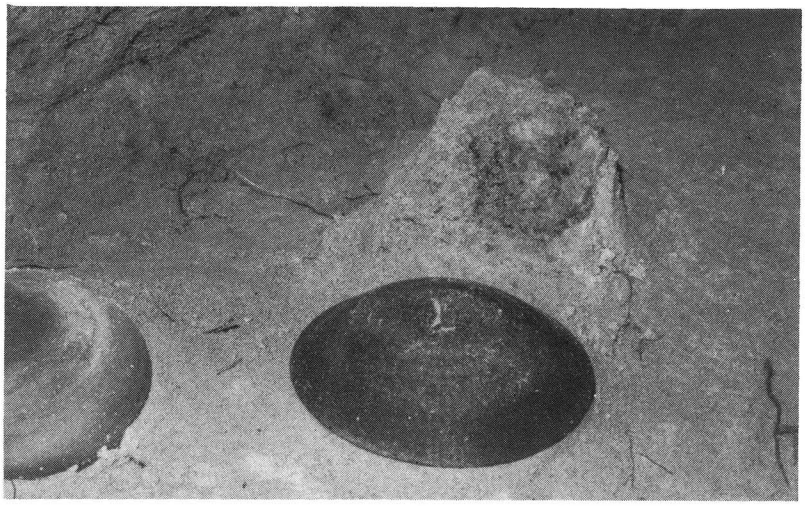
5号横穴墓遺物出土状況（玄室南¼、東から）

6号横穴墓前庭堆積土層（東から）

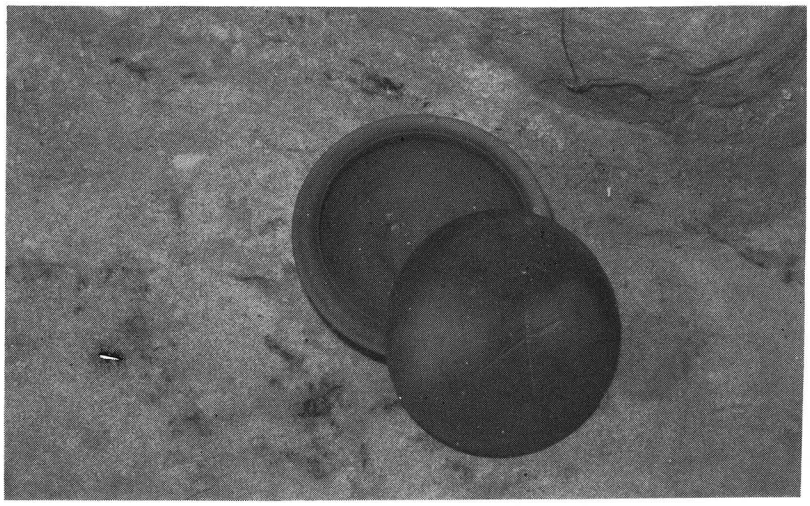
6号横穴墓羨門閉塞状況（東から）



6号横穴墓遺物出土状況（玄室から羨道）



6号横穴墓人骨及び遺物出土状況（玄室奥）

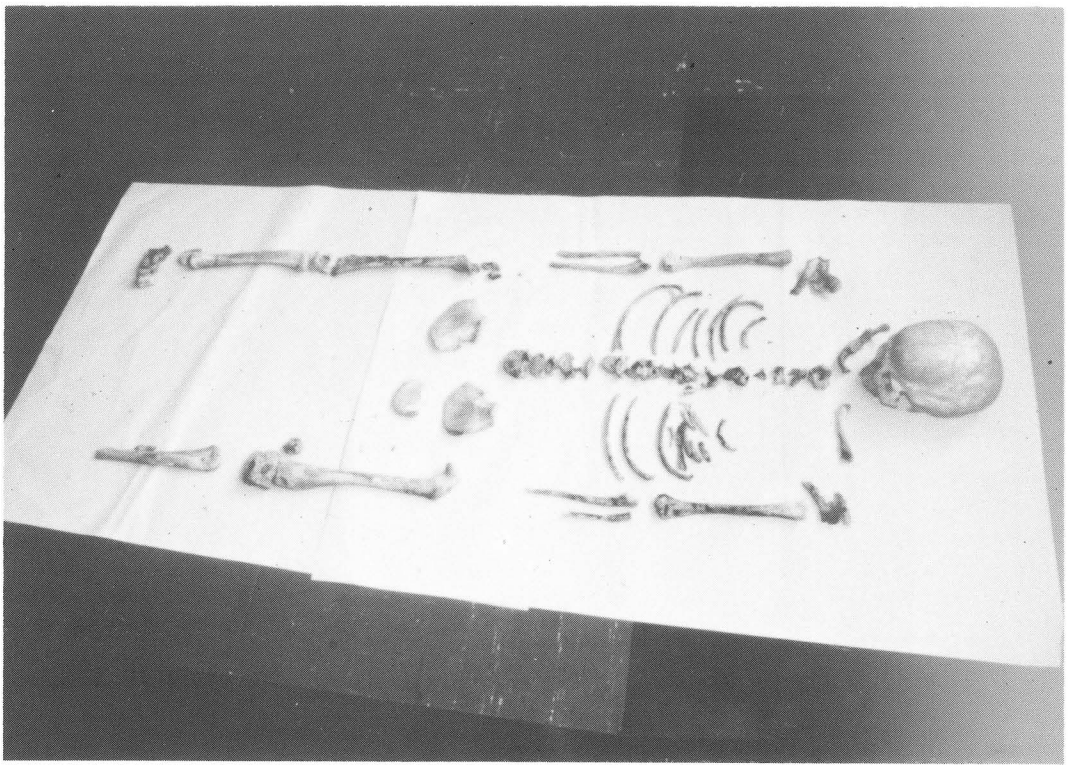


6号横穴墓遺物出土状況（左前壁ぎわ）

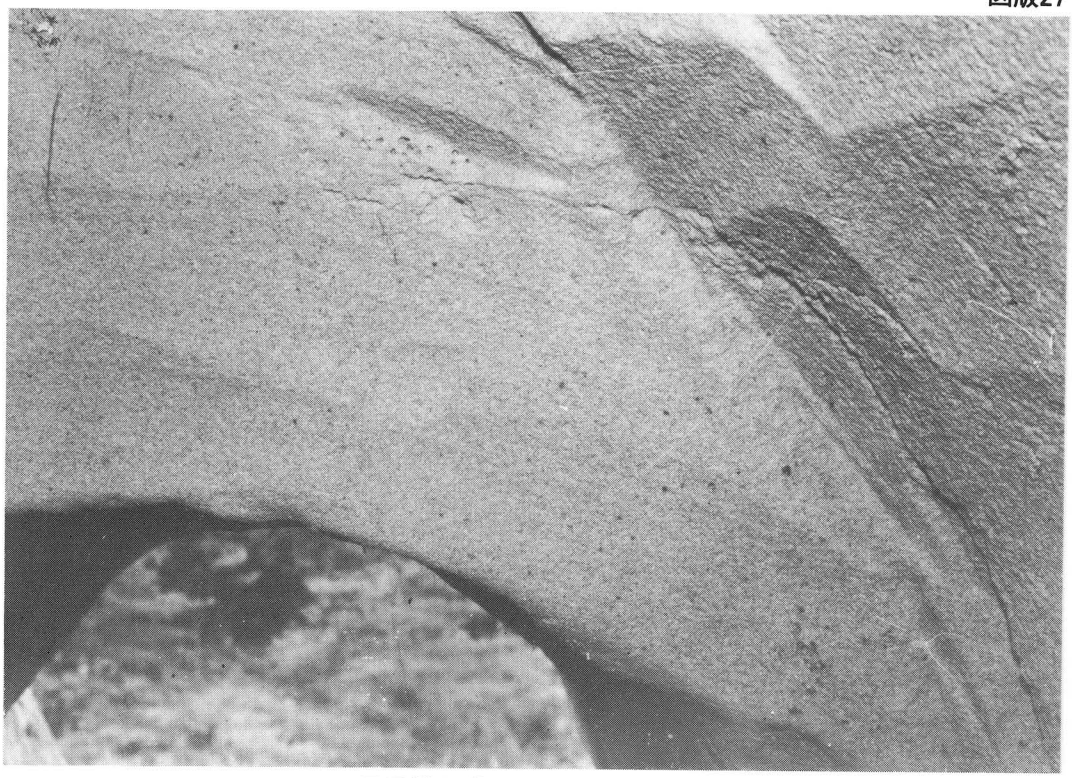
7号横穴墓羨門閉塞状況（東から）

7号横穴墓前景（東から）

7号横穴墓人骨出土状況（東から）



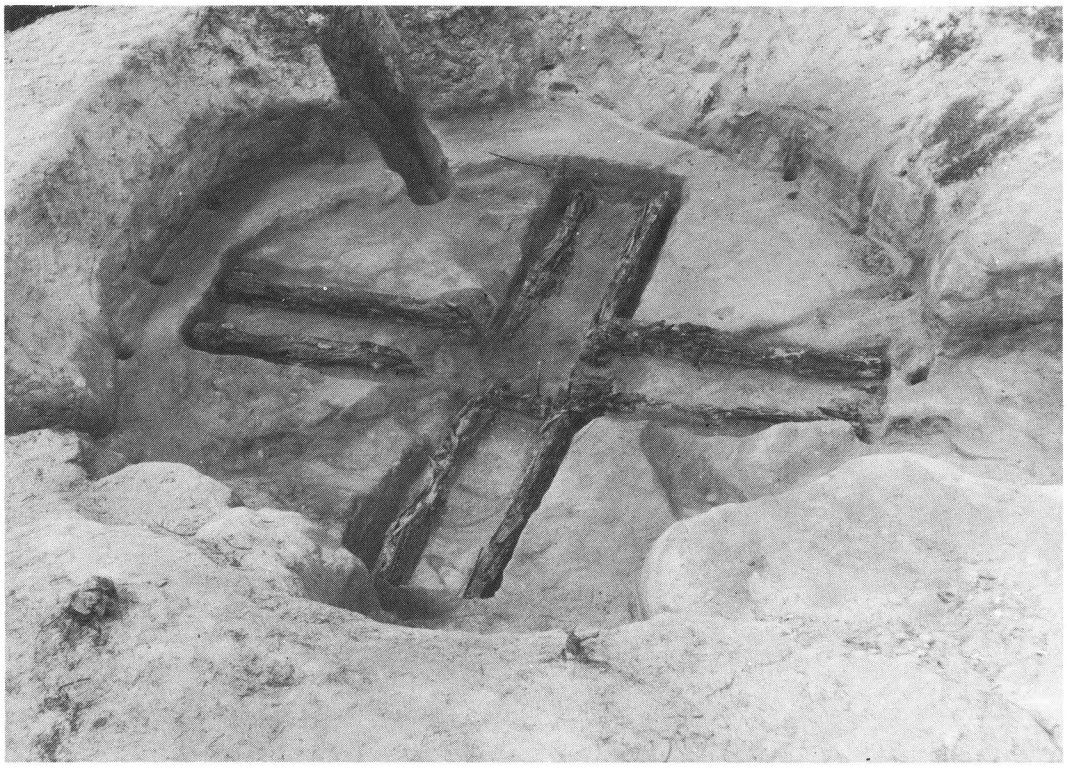
7号横穴墓出土人骨



7号横穴墓玄室加工状況（右前）

7号横穴墓玄室加工状況（左奥）

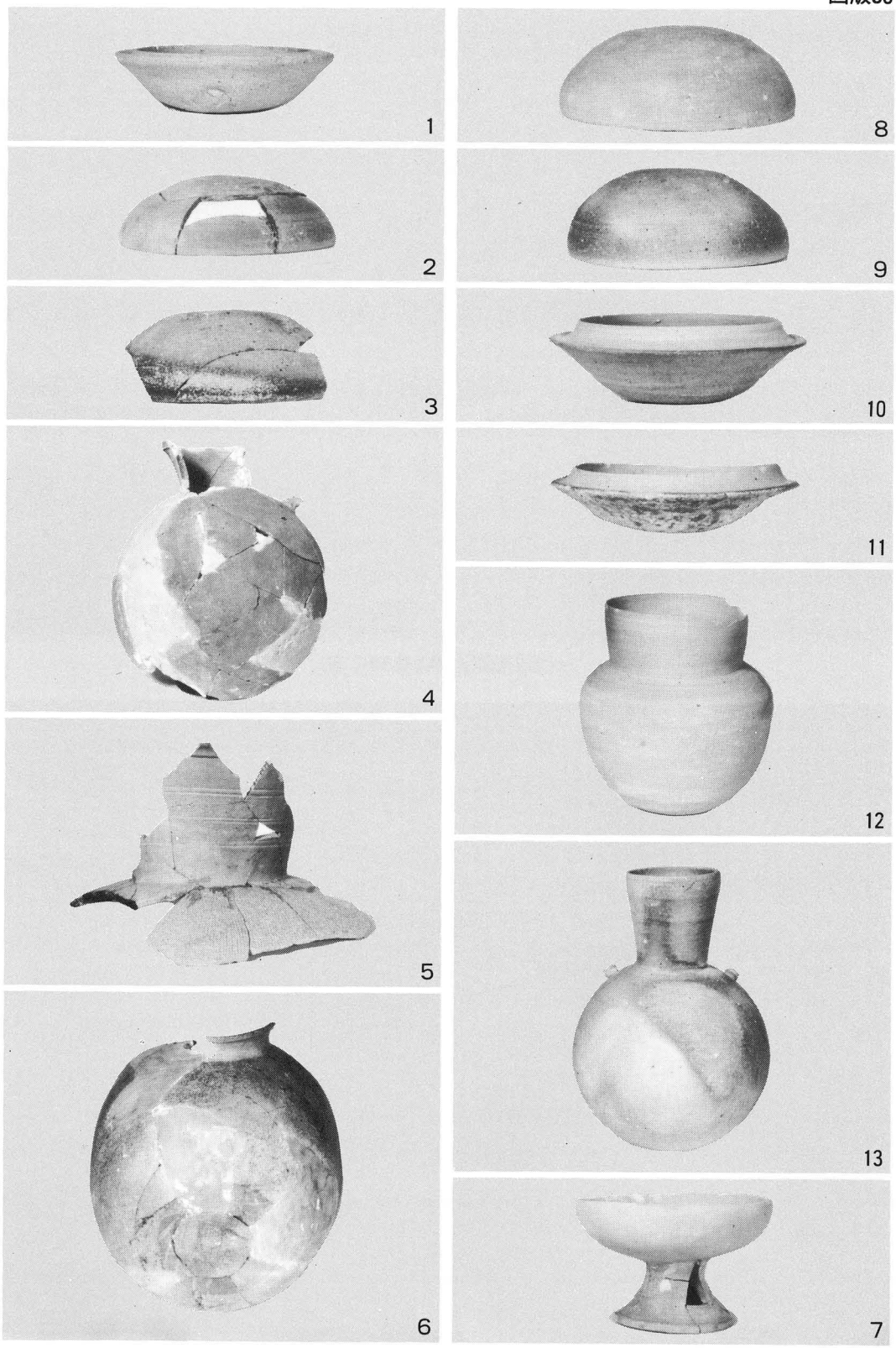
第７号高射砲陣地（発掘前）



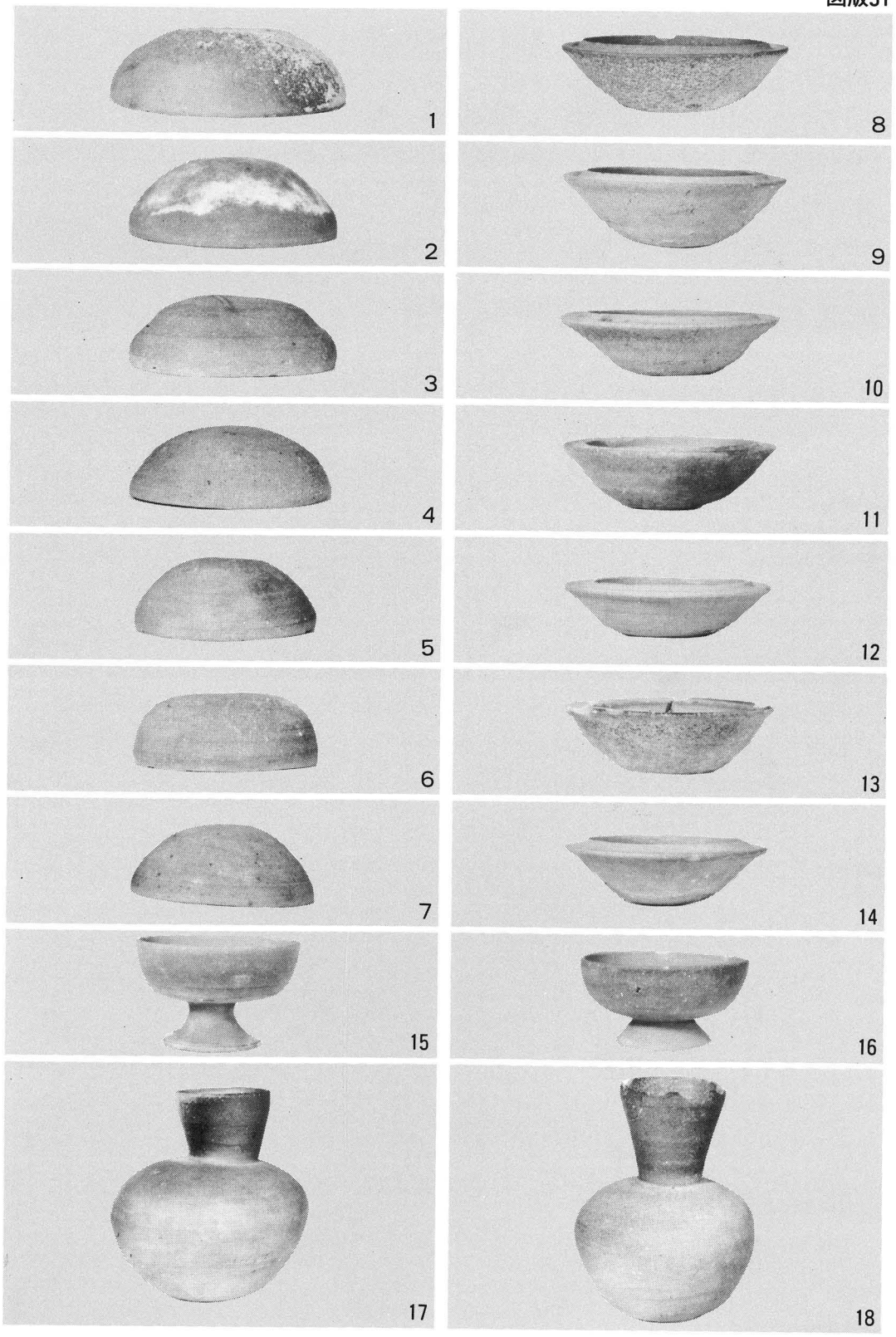
第７号高射砲陣地（発掘後）

間樋取水口（西より）

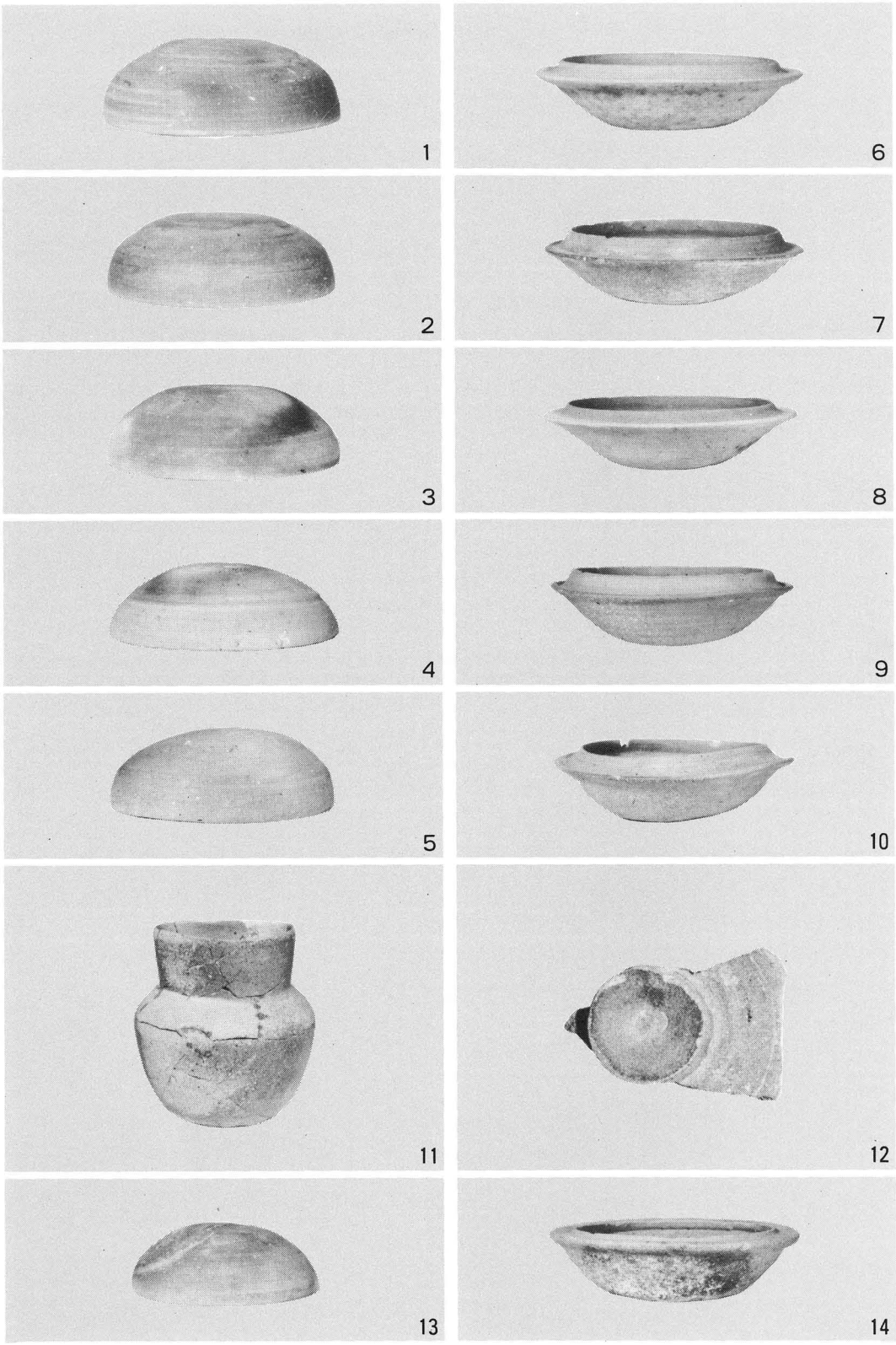
間樋排水口（東より）



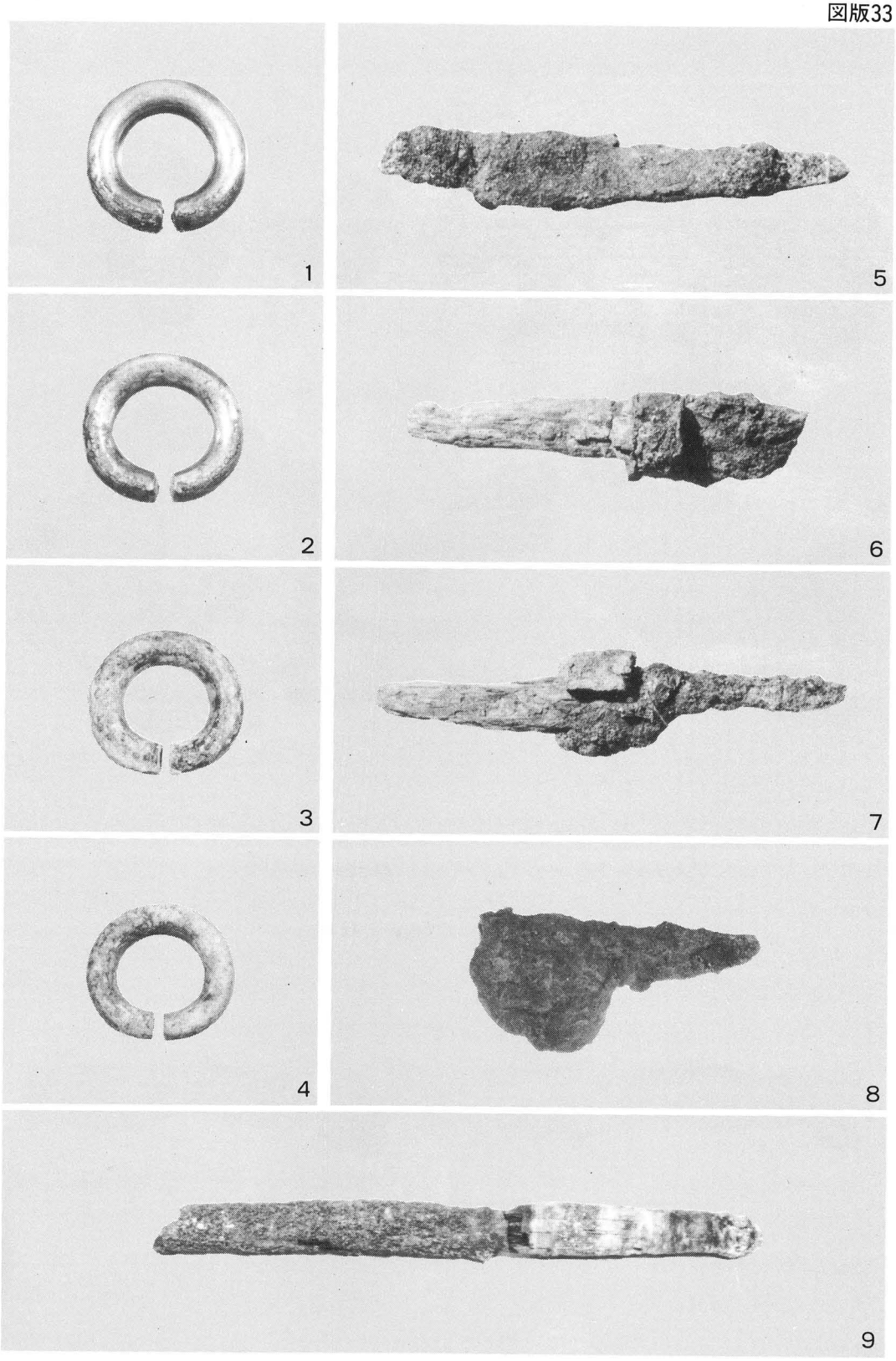
1号(1)、2号(2、3)、3号(5～7)、4号(8～13)、5号(4)横穴墓出土遺物



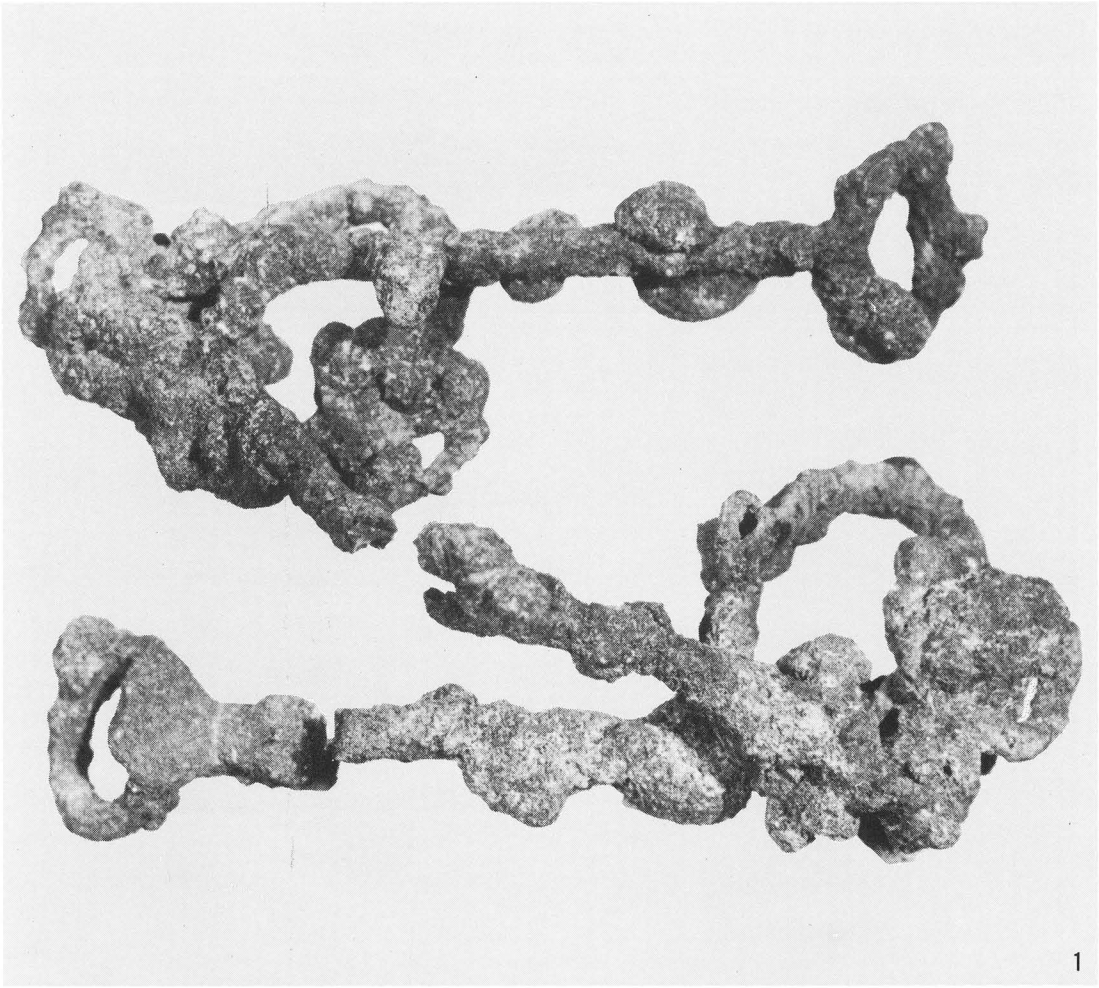
5号横穴墓出土遺物

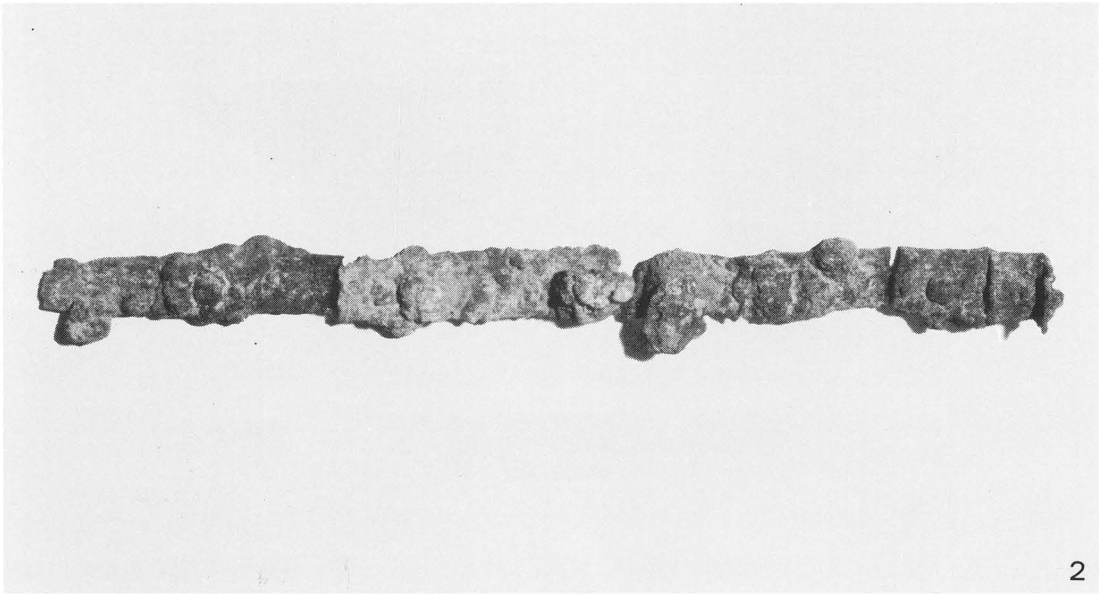


6号(1～11)、7号(12～14)横穴墓出土遺物



6号(1～8)、4号(9) 横穴墓出土遺物





5号横穴墓出土遺物（1は馬具、2は直刀）

平野遺跡群発掘調査報告書 I

1983年3月

発　行　島根県簸川郡斐川町
斐川町教育委員会

印　刷　島根県簸川郡斐川町
島根印刷株式会社
TEL(08536)3-3500